

---

# 獅子の誇り 革命の救世主

アマリリスーアマガミ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

獅子の誇り 革命の救世主

### 【Nコード】

N3427T

### 【作者名】

アマリリスーアマガミ

### 【あらすじ】

新暦3012年。かつて崩壊した世界を救った4人の英雄がいた。3000年の時を経て自由と平等と謳った英雄達の遺志は薄れ、4大陸の内主要2国家が1つ「ウインディ」は腐敗しきっていた。

街の現状をみかねゼツクスは幼馴染のマリアと共に革命軍『メシア』を立ち上げる。…本当に国を想うからこそ  
しかしそれを阻むのはかつての英雄が子孫ユミルだった。

国を想う2人が出逢った夜に永く凍れる時がついに動き出す。

止まっていた運命の時車が回り始めた時大陸全土の運命が紡がれる、  
剣と剣が交差する異世界ファンタジーが、今開幕！

## 劇会

…後10秒

…9、8、7

(ん?)

…6、5

(おい!なんでこんな所に!!)

…4

(冗談じゃない!!この革命の狼煙で、誓いを早速破るなんて!)

…3、2

(ええい!)

…1

「バカヤロォー!」

0

ゴオオオン!!!!!!!!!!!!!!

新歴3012年の冬の夜、王宮の南外周壁が大々的に爆破された。これが後に新暦に刻まれる事件の始まりであったことを、当時の人々はまだ知らない。

「まったく…おまえはなんてタイミングが悪いんだ」

そう呟きつつ手のひらに収まっていた黒い物体に目を向ける。

「ニヤオ」

今の激しい爆発音にも大して動じた様子を見せず、男の手の上で毛繕いまで始めた。

「まあいい、さ、俺は用事があるからお前も逃げな」

そういつつ男は両手を地面のそばまで下ろすと、黒猫は一瞬無邪気な瞳をこちらに向けつつも素直に降り立った。

「次はこんな馬鹿げた劇に巻き込まれるなよ」

そう猫に告げ男は王宮の方を凝視する。完璧な計画。警備の隙を突き宣戦布告とばかりに南外周壁を爆破し声明文を翌日に投稿するハズだったのだが…

南外周壁上に黒猫がいることに気付いた男は、爆破数秒前にも関わらず身を呈して猫を助けた。

この場合実行犯である男が助けても助けたというかは微妙な所だが。

「さて、これからだな」

勿論黒猫を助けるのは計算外。庇ってしまったがために逃走ルートに続く道が爆発の瓦礫で埋まってしまっている。更に言えばいくら外周壁を爆破させてしまおうようなザル警備でも国の警備である。もう数瞬すれば…

「動くな！このテロリストが！！」

男が振り向くと警備隊が王宮からも、他の外周の持ち場からも駆けつけてきておりその数おおよそで40人。

「思ったよりお早いご到着で」

そう思ったのは事実であり、余裕でもあった。警備兵の装備は主に電磁ロッドとS&W M37という標準的な銃であり取り立てて騒ぐような装備でもない。問題は

（革命軍としては不殺を誓い、革命成功時の原動力にするつもりだから厄介だ）

通じてみれば、この反旗において猫1匹殺していないという条件状態を市民に広く知らせなければ革命を成功させようが人心は掴めない。

「そうなりや手段は1つ」

男は警備兵を避けるよう路地へと駆け込んだ。

「くっ、どうなってるんだ!？」

男は困惑していた。路地裏を使う必要を想定していなかったため、地図は軽くしか頭に入れていないのでどの道がどこに通じているかはもはや分かっていない。

いや、この場合それすらどうでもいい。

敵の警備兵は男の進路を的確に塞いで来るのだ。広い通りにでて脚力勝負で撒きたいのに、狭い道、狭い道へと誘導されるように行く先全てを妨害されていく。

また、追いかけてくる数がもう尋常ではなくなってきた。

最初の40人を気絶させた方がはるかに楽だったと思える程数が膨れ上がり、警備兵だけでなく騎士団まで出てきたのでその数は1小隊の500人ではなく1中隊の2000人規模ではないかと思える。これだけの人員を即時導入、指揮した上で逃亡者である自分を確実に追い詰める地理把握力と判断力。

甘かった。その1言が痛恨のミスのように心に刺さる。

もとは下水道を使う手筈だったため、地図をうる覚えで済ませた。無事に帰れたら副司令官である幼馴染になんと言われることか。

「…っ!」

そんなことを考えていれば、もう終点は見えていた。

恐らく市街地整備の際偶然余ってしまったスペース。それを塞いだだけの壁。

つまり進むことを拒否する完全な行き止まり。

後ろ手に聞こえる鎧の重たそうな金属音やら、けたたましいまでの多勢の足音。

ついに爆破犯である男は追い詰められた。

観念したようにゆっくりと振り返るが、視界に収まるのは人、人、人……数える気力も沸かない。

（どう切り抜けるか？この人数を殺さずなんてのはもう無理だ。しかし手はあるはずだ、例えばあいつがくるとか）

そう考えたが、基地で大人しくしているように致命したのは他でもない自分だ。テレパシーでもない限りこの瞬間に来てくれることはないだろう。

「……しゃーないか。目立ちたくないから隠しておきたかったんだけどなー、敵さんには」

男が目を鋭く相手へ向けようとした刹那

「待ちなさい」

凜と夜空に響く澄んだ女性の声が、熱気猛々しい兵達をにわかにかにさせた。

（誰だ）

いや、この状況で思い当たるのは1人しかない。

そう、王宮きつての実力者であり騎士団隊長、3000年前世界を救った英雄が筆頭の子孫、『ユミル』。

カツッ、カツッ、

ブーツの音を規則正しく踏み、おびただしい兵隊が従順に道を空けていく様はまるで劇の主人公のようだった。

男と対面できる距離、おおよそ10m程でユミルは足を止めこちらに言葉を投げかける。

「私はウインディ王国騎士団隊長ユミル。賊よ、あなたの目的が何なのかは牢で伺いましょう。その後しかるべき処断を受けていただきます」

凜としていた。言葉を発する度に鈴を思いだしそんな澄んだ声が夜闇によく融け、冷たい夜風にさらされる黒髪は絹のようにサラサラと美しくなびき、同時に鋼のような意志を持った燃える瞳がそのたずまい全てを輪郭のある美しさとして象徴していた。

「あなたに出頭していただきます。大人しく捕まる気ならば名前を名乗った後、拘束を甘んじて受けなさい。拒否する場合は実力で行使させていただきます」

ハツと男は我に返った。僅かな間だったとはいえ、ユミルが次の言葉を発するまでの間見惚れていたのだ。

(ハハツ、こりゃこんな土産話は絶対に聞かせられないな)

そう自分を皮肉った後、意識を正面のユミルに戻す。∴今は敵として「俺の名前か、あいにくお嬢様に名乗る名前は持ち合わせていなくてね。俺が名乗るのは仲間か実力を認めた相手だけなんだ」

そう肩をすくめながら安い挑発をする。これで剥きになる位なら簡単な相手だと推し量れるのだが、

「そうか」

その一言だけで周りの兵も、当事者たちも理解するには十分だった。

動きは瞬速。男が自分の武器を引き抜き防御に回れたのは今までの訓練による反射だけだったが、挑発した側の動作の戻りの遅さ、慢心が勝敗を決めるには十分すぎる一瞬だった。

ユミルが振るった大剣はその重量や長さ全てを無視した短剣かのように、一刀のもと一瞬で男へと振りぬかれていた。

縦に220cm横に80cm、剣身の幅だけでも15cmはある超重量の大剣は男がガードに使った刀など空気と同程度かのごとく切り払い、男は後ろの壁に激しく叩きつけられた。

サンシャイン。英雄筆頭の『翼』が使用したと言われる伝説の大剣。オリハルコンという伝説の太陽金属により生成された剣はかつて黄金に輝き、神話のような闘いにおいても最も強力な武器だったというが、長い年月により力が風化し、今は黒曜石のように暗く沈んでいる。

そんなことを思い出しつつ、男の意識は闇に落ちそうになったがなんとか立て直し、自身も叩き付けられた身を起こす。

(つつう!!こりや背骨が確実にやばい!)

あまりの衝撃と油断により、受け身すら取れず無様に壁に叩きつけられた男は背中に大きなダメージを負っていた。

通常脳からの電気信号は脊髄を伝って全身に運ばれるので、背骨へのダメージは戦闘面ではかなりのハンデとなってしまう。そう、手が痺れ足が重く、我慢できない激痛で視界が歪む。

ぼやけかけた視界でユミルを見ると、すでに背を向け部下に拘束させる指示を出そうとしている所だった。

(そうは…させるかよ!)

男のプライドに懸けて、このままでは終われない。

ズガァン!

ユミルが振り向くと、男は銃を空に向かって発砲していた。何故？とユミルの頭によぎる。今打てば確実に後ろから不意を突いた銃弾がユミルを捉えられたはず。勿論振り向きガードすることも、避ける事もユミルには造作もないが相手がやけになっていれば必ず取る選択をしていなかったことにユミルは驚く。

そんなユミルの表情に満足したのか男はユミルへと笑みを返す。少し引きつった笑みになってしまいが、ユミルも何とはなしに男の言いたいことが分かったようだ。

男はナイフが付いた銃剣をホルダーにしまつと、2 mを超える長刀をユミルへと真っ直ぐ突きだす。

「俺の名前は、ゼックス・レオンハート。革命軍メシアがリーダー、ルナグルスの使い手だ。王国軍隊長ユミル。お前を認め俺の全力を持って相手する」

ユミルの後ろに控えて兵達からは失笑が漏れているが、ユミルはむしろ知らず背に汗をかき、左足が知らず半歩下がっていた。

（気迫が違う、目つきが違う、ダメージを負ってなお立ち上がる精神力。この感覚：本当に侮っていたのは私の方？）

ゼックスから見てとれる気配はユミルが弾き飛ばした前と後では別人のように違う。

隙もなく、5 m程離れた位置にいても突きだされた刀は喉元に刺さるかのように息苦しい。

ユミルは悟られることなく静かに息を吐き出し、大きく息を吸い込む。

「貴殿の気迫を認めよう。…尋常に、勝負！」

ユミルは上段に大剣を構え、ゼックスは刀を鞘に戻し抜刀の構えに移る。

周りが静まり返っている。ゼックスだけでなくユミルの本気の気迫同士がぶつかり合い、もう実力が違うものでは口を挟むことも、指を動かすことすらできない。

今ここに戦士達の舞台は作り上げられていたのだ。

風が2人の間を駆け抜けるが、2人は微塵も動かない。

瞬きすらなくお互いを見つめあう様は、お互いがお互いを認めただための決意を映した鏡のようだった。

10秒、20秒…1分…

誰もがカウントすら取れない程意識を2人だけに集中し、このまま夜が明けてしまうのではないかと思う最中、兵の1人の足が僅かに動き、砂の音がかすかに聞こえた瞬間、2人は弾けた。

「ハッ!!」

「オオ!!」

ユミルの上段から力に任せた渾身の一撃  
ゼックスの技量から放たれる瞬間の一刀

両者の魂を乗せた全力の一撃が眩い火花を散らすかのごとく重なり  
あい……

## 過去の英雄

キーン……

後ろにいた兵達に驚愕の表情が走った。

国最強の剣士であり、英雄の子孫でもあるユミルの見た人全てが驚嘆するような大剣が上空へと弾き飛ばされていた。

「そ…そんな……」

本人に至っては現実を受け止められない位驚き、目を見開いていた。ただ自分の手の中に生まれた時からある剣の感触がないことに、呆然と立ち尽くすほか何も知らない。

目の前に自分を負かした男がいるというのに、視線を男に移すことも、自分の剣を追うことも考えられない。

だが、そんな意識を唐突に打ち切ったのは何かが地面に突き刺さる音であった。

初めは自分の剣かと思ったが、自分の剣ならば地面に刺さる音ですら聞き分ける自身がある。しかし、落ちてきた何かはもつと軽く高い音だったのでユミルは視線を移して確認しようとする。

そこで目に入ったものは、ユミルの想像とは違った別のものであった。

(刀…の半分?)

刀と言えば先ほど自分に勝負を挑んだゼックスという男の武器であったことを思い出すと、ようやく目の前の男に視線を移すことができた。

そこでユミルはようやく状況全てを飲み込むことができたのだった。

(そうか…相打ちだったんだ。追撃が無かったのはさっき私が弾き

飛ばしたダメージが大きかったため、今の抜刀術の威力に体が悲鳴をあげた結果、か)

ユミルに少し安堵の表情が戻る。単純に力負けしただけよりは相打ちという形であればまだ負けという感情が記憶に残らずに済む。

しかし、ユミルは首を振る。

(でも、もしこの男が万全の状態だったら？もし、この刀が名刀と呼ばれる程の一振りだったら？結果は今回とは違っていたかもしれない)

その想像にユミルは背筋が凍る。今回は本当に運が良かっただけかもしれない。

王国に反旗を翻した犯罪者、それが王国最強と謳われている自分を超えるかもしれない実力を持っていた。

(世界は…広い)

ユミルがそう感慨を抱いた間に状況が少しずつ動いていたことに、まだユミルは気付いていなかった。

「もう…ちょっとだった…んだけどな」

そう呟いたゼックスが態勢を崩し、前のめりに倒れたのだ。

「えっ？」

少し考えごとをしていたユミルの反応が遅れる。

そして、誰もがこの場で予想し得なかった事態へと発展してしまっていた。

「……………っー!!!？」

ゼックスとユミルの唇が触れた。

本当にキス程深く触れたわけでもなく、本人達も全くの意識の外であり、拳句にはゼックスは気絶痔に倒れた不可抗力なのだが、それが初めての異性とのキスであったユミルには耐えがたい恥じらいが

体中を暴走したように走り回った。

「い……いやああー！！！！！！！！！！」

その叫び声と同時に体中の筋力という筋力のリミッターが外れ、限界を超える力において

打ち抜かれた見事なストレートがゼツクスを砕くように貫き飛ばした。

先の弾き飛ばし等比ではない程の勢いで壁に迫ったかと思うと、壁が衝撃に耐えられず砕けちったが、ゼツクスはまだ勢い衰えず更に後方の壁をぶち破り、更には次の壁、次の壁とまるで障子のように次々と貫通していき、最終的には7枚もの硬石の壁を砕いてようやく地面に転がり落ちることができた。

「はあっ！はあっ……！」

ユミルが恥ずかしさに顔を赤くし、肩を上下させるがそれでも胸の鼓動は収まらない。

それどころか、さっきの感触を脳が勝手に思い出して…

「！！何してる！王国転覆を企てた犯人を仕留めた！すぐに確保に移れ！」

後ろに控えていた兵達に怒気混じりの声で命を発すると、少しだけ思考がクリアになった。

これ以上自分が人間として、女として意識してはいたくなかった。

王国の剣として責務を全うする自分が至上、他の事は切り捨ててきたのだから。

（なんでこんなやつにこんなに乱されなくてはならないの?!）

無駄な思考を夜に捨ててしまいたかったが、これだけ騒がしい夜ではその考えが叶うことは難しかった。

「……う、ぐっ！つう！！痛てて。……ここは？」

ゼックスが目を覚ますと室内、それも日の光が当たらない恐らく地下に移動されていた。

「ってことは……」

そこまでの眩きが聞こえていたのか、そこから先を引き継ぐ声があった。

「そう、牢屋。お前は反逆者として捕えられたんだ」

ゼックスは声のする方へ振り替えろうとしたが、全身を激痛が走りミリ単位で動かすことすらはばかられた。

「がっ！？」

叫び声を出してもその声を出すだけでも痛みが走る。どうにか痛みを意識しないよう感覚を遮断するように我慢し、叫ぶことによる痛みの連鎖を断ち切る。

「声を出すだけで死にそうか。それは困ったな」

何が困ったのかは全く分からないが、とりあえずゼックスが理解できることは2つ。

自分の身の危険性と、目の前の相手がユミルであろうということだけだ。

「目を改めるとしよう。残された時間は少ないが、それでも喋れる位まで回復してくれることを願う」

そう言い残すと、ユミルは階段を昇っていつてしまった。

「…参ったな」

かすかに呟いた独り言は誰にも聞かれることなく、消えていった。

階段を昇りきったユミルは大広間入口へと繋がる通路へと出たが、

そこで兵の一人が待っていたかのようにユミルに駆け寄ってきた。「どうした?」

簡素に聞き返す隊長としてのユミルに、兵も自然背筋を伸ばし報告内容を伝える。

「戻られ次第王の間に向かうようにと受けております。ユミル様、お急ぎください」

敬礼をしながら兵は下がり、ユミルは頷き早々に王の間へと向かうことにした。

「騎士団隊長ユミル、ただいま参りました」

ユミルは恭しく挨拶をしてから、膝を折り傳く。

「ふむ、先の件は御苦労だった。数時間以内に賊の確保は見事なものであった」

「勿体なきお言葉」

「だがしかし、こうした事件はいかな。民の心に不安や惑いが生まれてはこよう。そこでだ、即刻賊の公開処刑を行い今後2度とこのような乱心を起こさないよう反乱の気力を削ぎたいと思うのだが、どう思う?」

ユミルは一瞬の沈黙の上で答える。

「確かに逆賊ではありますが、彼は自分を反乱軍と言っております。たのでその情報を吐き出させてからでも遅くはないと思われます」

「それも一理あるが、それでは奴らの仲間が無駄に特攻をかけて私の命が危なくはないのか?」

「……その可能性も考慮には入っておりますが、ご安心を、そのための我ら騎士団です。鍛錬を重ねてきた我ら騎士団は逆賊に等決して遅れはとりません」

「むう……しかし」

「王よ、ご自愛いただきますのもよろしいが、国全体を見て考えてもみればまずは敵の解明、その後の鎮圧の方が長い目でみた時の常かと」

王が悩み始めた所に、横から口を挟む者がいた。

「しかし元はといえば王宮の外壁を爆破される等警備の失態にも程がある。そんな警備に王の命を預けるといつのもいささか王が心配される要因であると思わんかね？ユミル隊長」

颯るような目でこちらを見下ろしてくる大臣の1人。この男とはいつも反りが合わずに意見をぶつけられては潰されてきた苦手、というより妬ましい相手だった。

「その点においては大変申し訳なく思っております。ですが…」

「ですが何かな？この場に呼んだのは今回の件に関しての君の失態の報告とその責任の所在の在り方についてだ。王に意見するためには呼んだわけではないことをいい加減理解していただきたいな。ユミル隊長」

ハッキリとこちらを会議から外す言葉に、さすがにユミルも内心怒りを隠せないが王の御前。平静を装うしかない。

「…今回の件に関して実際の警備担当兵の処分は決定済み。また、弱くなつた南外周壁には警備の人数を平時の2倍に増やし警戒レベルを引き上げております。他地域に関しても同様に警備レベルを引き上げ、市街の巡回に騎士団の2中隊を派遣しております。同様に王宮内部でも騎士団はいつでも出動できるよう厳戒態勢を敷いております、先10間程はこの状態の維持を考えております」

大臣は少し考えてから、改めてユミルに言葉を投げかけてきた。恐らくこの論点のズレに目をつけていたに違いない。

「事後対応はそれで問題ないですな、ユミル隊長。しかし、責任の所在はどうしたのかな？これだけの失態を隊長であるあなたは責任を取らないと言外に申しているように聞こえたのだが、はてさて私

の気のせいかな？」

本当にやりにくい、政治家というのは正論であつても搦め手によつて正論を崩されてしまうことが多々あるのが武人として真つ直ぐに育つてきたユミルには堪える。どうして人は真つ直ぐに生きられないのだらう？

「責任を持つて辞職や、前線から私が退けばそれこそ警備の穴に繋がりますよ。この軍の指揮において私より優れているのは鼻屑目なしにみてもまだ育つていないため、今ここで私を外すことはもはや国へ誓つた忠誠をないがしろにしているとは思いませんか？王よ、ここで上の権力に任せるしかないのが何とも悔しい所だが、こんな所できがみ合つて時間を潰している暇はない。やるべき事はまだまだ多くあるのだ。」

「ユミルの言うことももつともだ、それにユミルのことは信頼しておる。今為すべきことは逆賊に対するの対応だ。それなのにユミルを前線から外すのは道理が外れているとは思わんか？」

普段頼りない王だが、権威という衣さえあればあの憎らしい大臣を黙らせられるのが権力という「力」であつた。大臣の沈黙を肯定と取つたのか王は言葉を続ける。

「では10日間だけ猶予を与える。その間の警備はユミルが全責任を持つてねずみ1匹通すな！10日後に逆賊の公開処刑を執り行い反乱軍の火種を潰す。これが今回の決定となる、異論あるものはいるか？」

王が周りを見渡すが、王の決定に口を挟む人間等いるわけはなかった。この決定事項としての形式的な確認であることを皆が知っている。

「では各自引き続き自分の仕事に戻れ。2度と逆賊を出さないような政事を期待している。ユミルはそれと同時に逆賊の聴取も進める、進展した結果を出せ。以上だ」

固くなつた足を立ち上げ、ユミルは会釈を残して王の間から退出し

た。立ち上がる際にこちらに目を向けた大臣の忌々しげな顔が、少しユミルには引っかけかかっていた。

ユミルは王の間から出るとまた地下牢へと向かった。

暗がりや広がり、カビ臭い匂いも充満していき、それが人のいるべき場所ではないと本能的に思わせる感覚がある。

(きつと誰もこの感覚は変わらないんだろうな)

この国では犯罪者はそれ程多くはない。裕福な貴族も、それなりの暮らしをしている平民も、下を見れば下がいたので誰もそんな場所に行きたい等思わない。だからこそ平和は続く。

だが、誰もその下には追求しない。言及もしない。

あることは知っていても誰も見ようとしない。そこでの犯罪すらなかった事にしている。

下には下の暮らしがある。国の一部であるにも関わらず国の一部ではないという意識外。切り捨てているが、意識の下では切り捨てていないという矛盾。そんな矛盾を国民全員が抱えている。

更に言えば下の民も恐らく不平不満は抱えているだろうが、誰も上がってこよう等とは思わない。これだけ差別された仕組みが出来上がっていると、誰もが分相応というのを弁える。

それがこの国、あるべき姿だとユミルはずっと思っていた。

しかし、とユミルは考える。

「間違つて…いる？」

自分も国のためをと思い、研鑽に研鑽を重ね、恥じるべきものがないような道を歩んできたつもりだ。

でもそれはこの間違つた常識の中で、育てられた歪みではないのだろうか？

もつと人として当たり前のことに気付くならば…差別というものが無い世界を望むべくではないのだろうか？

たった1人単身で王宮に間違いを突きつけてきた男の存在は、ユミルに考えるキツカケを与えていた。

(確かめたい)

その一点だけを胸に再び地下牢へと訪れた。

「ゼックス・レオンハート、返事をしろ」

牢屋につくなり呼びかけるユミル。やや間が空いてから小さな声が答える。

「いるよ。でも寝かせてくれ、体中痛くてしょうがないんだ」

恐らく全身凄まじい重症なのだろうが、逆賊として捕えられた彼には包帯も消毒薬も与えられていない。まさに自分の治療能力の限界が試されているような状況ならば、眠って少しでも痛みを和らげていたいのだろう。

そんな状況にほんの少し申し訳なく思う。剣が交差した瞬間本当は勝負はついていた。が、その直後のトラブルのせいでゼックスの重症はとてつもなく悪化したからだ。

思い出すと顔が赤らみそうになるので、思考を一旦中止、クリアにしてから改めて話しかける。

「お前の処刑日が決まった、10日後だ」

…違う、確かに伝えておきたいが本当に聞きたかったことはこれじゃない。自分の気持ちに素直になれない自分に少し苛立つ。

だが、ゼックスはさほど気にした風もなく淡々と答える。

「分かった、さ、話は終わりか？」

特に話すこともないとばかりに強引に話を切ろうとするゼックスにもまた少し苛立つ。

「…お前の仲間はどうしている」

違う！だから何故こんなにも自分の感情を素直に引き出せないんだ！  
「仲間は売れないな」

ゼックスの事務的な口調は変わらない。こんなもの素直に吐露するようならば、とてもじゃないがあれだけ真っ直ぐな力を手にしてはいないだろう。

今回は上手くいきそうにないと悟ったユミルは、若干早足で元の場所へ帰ろうとするが、その背にゼックスから言葉がかかる。

「隊長さん、あんたはこの国が好きか？」

ユミルは一瞬ビクツと跳ね上がる。肩が知らぬ間に緊張で少し上がってしまっている。

こんな1人の言葉に何故こうも動揺してしまうのかも掴めぬまま、答えを頭で考えるより反射で答える。

「私はこの国の隊長だ。疑問を持つこと等許されない」

この返答に食い下がってくるかと待っていたが、一向に新たな問いかけはやってこなかった。

沈黙が返答なのだ気づいたユミルは再び階段を昇り始めていた。

「……かつての英雄の遺志ってのはどこに行ってしまったんだろうな」

ただ宙を見上げるしかできないゼックスは誰に聞こえるわけでもなく、密かに呟いた。

## 想いを胸に

翌日、ユミルは早朝から地下牢を訪ねていた。

地下では陽の光が差し込まないため、早朝だろうが、深夜だろうが変わらない景色でありそれが収容された犯罪者に時間の感覚を狂わせ、不安を煽る。

だが、そんな常識もこの男には当てはまっていないようだった。とても深い眠りに落ちているようで呼吸音が酷く静かだ。動きも胸の上下位なもので本当にただただ生きる最低限の動きに見えた。

とりあえず、観察はそれ位にしてゼックスに声をかける。

「起きろ、ゼックス・レオンハート。聴取の時間だ」

そう短く言い放つと、ゼックスも目を覚まし首をこちらに傾ける。

「おや？違和感を感じたのきつと昨日は動くことすらままならず宙を見上げるだけだったのに、今日は首をこちらに向けたからだろう。」

「驚いたな、まるでトカゲの尻尾だ」

ユミルは素直に驚嘆の意を口にする。ゼックスはそんな言葉を受けてブスつとした顔でぶつきらぼうに返す。

「心外だな。こっちとしては意識がない内についての間にか首すら動かせない重症の拷問を受けていたってのによ、トカゲはないだろトカゲは」

口調に軽口が混ざり始め、昨日の事務的な受け答えよりは幾分今日は人間味を感じられユミルは内心ホツとする。

「反逆者には容赦しないからな、さて、昨日の続きを話そうか。まずはお前の所属と目的、後はアジトと仲間についても喋ってもらおう」  
毅然とした口調に戻したユミルに対して、ゼックスはまだ軽口を止めていなかった。

「なあ隊長さん、あんた結構美人なんだな」

カツと顔に朱が一瞬差すが、すぐまた取り繕って固い口調のまま話

を戻す。

「答えるつもりがあるならお前の処遇の検討もある程度しよう。このまま寝たきりのまま誰に何を残すことも出来ず死をまつのは辛いだろう?」

諭すような口ぶりで誘ってもみるが、ゼックスの態度は一向に変わらない、いや、むしろ酷くなっている。

「最初情報隊長が女性って知った時はどんな筋骨隆々な奴かと思っただが、あの夜初めて出逢った時は本当にビックリしたぜ。正直に言うと一目惚れしそうな位あの夜闇の中であなたは映えていた」

歯の浮くような台詞を軽々と言つてのけるゼックスに、呆れを通り越して怒りが徐々に沸いてきた。こちらは譲歩しているにも関わらずこの態度は何だ、と。

「さすがは英雄の子孫、容姿端麗、文武両道と向かう所敵なしだな。敵つてのは勿論男つて意味……」

ガンツ!!

牢を蹴った音だと気づくとさすがのゼックスも言葉を途切った。

「いい加減にしる。今は私が質問している立場だ。質問に答える気がないならば今すぐ処断してやつてもいいんだぞ」

本気の目でゼックスに威嚇のように迫るが、ゼックスはそれでも全く動じなかった。

「あんたには無理だ」

それがゼックスの軽口の余裕であり、またユミルに対する宣言であった。

「無理なもんか、私は……」

「無理だよ、あんたの目を見れば分かる。あんたは本当は人を殺したこともない、綺麗すぎる人間だ。汚れ役を背負うには無理な器なんだ、英雄という『名前』の重さを背負い切れていないあんたには」

気付けばユミルの方が1歩下がっていた。…何故この男の方が私の内面に踏み込める言葉を知っているんだ。そんな未知の恐怖がユミルには広がっていた。

「その顔、本当に汚れていないんだな。だからこそ俺から忠告しておくよ。……この国の常識つてのを冷静に考えた時にきつとわかる、『真実』が」

昨日から引きずっている頭の中で何度も自問自答している内容を見事に突かれ、ユミルはたまらず地下から逃げ出した。

「…あんなに純粋なのに、なんで歪んでしまっているんだよ」  
ゼックスは悔しそうに歯を噛みしめた。

「ハアツ、ハツ！」

地下から廊下にでたユミルは息がきれ程動揺していた。何故あれだけ人の内面を見抜ける？大臣達とは違う人の内面のえぐり方をゼックスは知っている。

そして、その指摘はこの国を外から見た時に間違っていると分かっ  
てしまう正論だというのが怖い。

自分にはこの国を守る責務がある。この国に忠誠を誓った剣がある。だが、英雄の子孫と呼ばれる度に何度か思ったこともある。いつの時代からだっただんたろう？英雄とは人の頂点にいるものだと幼いながらに思った。だが、今頂点にいるのは現国王。自分は貴族でもなかった。

騎士を自分で志願し、自分の力で昇り詰めてきた。英雄の子孫だと何度言われてもむしろそれを誇りに変えて、血を吐くような研鑽繰り返してきた。

だが、と考えてみればこの国には矛盾が多すぎる。歴史の書物を見ても自分以外の子孫の名前は出てこないし、両親も自分が幼い頃に他界してしまっただけのため過去の話を知ること出来なかった。

ただ、物心ついた時から握りしめてきたサンシャインだけが自分と英雄の接点だった。

これがあったからこそ自分は信じ続けられた。自分もかつての英雄のように世界を守れると。

だが、蓋を開けてみれば議論でも弾かれる毎日、ただ己と部隊の鍛錬に費やす日々、逆賊に諭される自分。何もかもが現実では上手く回っていない。

自分の力を過信しているだけの子供なのかもしれない、そう思える程今のユミルの心は乱れていた。

「私は……」

泣きそうになるのを堪え自分の部屋へと急ぐ、今の顔は誰にも見られたくはない。

何かが始めた日常はこれほどグラグラするのだと、ユミルは初めて知った。

その翌日、ユミルは再びゼックスの下を訪れる。

聴取という名目でまた早朝から人気のない地下へ、まるで誰かに見られたら困るから早朝を選ぶかの如く。

「起きろ、ゼックス・レオンハート」

昨日と変わらず名前を呼び、牢の中の男を起こす。昨日より呼吸が浅かったことをみると怪我の回復は本当にトカゲ並かもしれないとユミルは再び思う。

呼びかけられ、また首だけをこちらに向けて話に応じようとするゼ

ツクス。

「よお、お姫様。また会いに来てくれたのか、嬉しいな」

何故か笑顔を見せるゼックスに一瞬驚いたが、また聴取を行う。

「質問は昨日と同じだ、答える気になったか？それとも質問はもう一度した方がいいか？」

言外の皮肉にゼックスは少し苦笑を交えて答える。

「質問の答えは黙秘だ。だけど俺からの質問に答えてくれるなら、俺も答える気になるぜ？」

昨日より砕けて話すゼックスに何故か安心するユミルだが、それが何故かは自分でも判らなかつた。

「内容による」

簡素に答える自分だが、これでは初日とまったく逆ではないか。自分の方が事務的な口調になっていることに気づいて思わず嘆息してしまいたくなる。

だが、そんなことに気を悪くもせずにゼックスは問いを放つ。

「あんたの昔話を聞かせてくれないか？」

意外すぎる問いだつた。

まるでユミル個人の事を知りたいと切望するようなものだ、それこそ恋人にでもならない限り聞きたいなどとは思わない内容だろう。ユミルが顔をしかめるのを見届け、ゼックスが言葉を続ける。

「別に難しいことじゃないだろ？俺は興味あるんだ、だから素直に聞きたい。駆け引きとかなしに、な」

ゼックスがとても人懐っこい笑顔を浮かべお願いしてくる。

そういえばゼックスは何歳なのだろう？今までそんなことも考えなかつたが今こうして見ていると、どこかあどけなさを残しているような気もする。それこそ自分と同じ10代後半位か？

邪気のない笑顔にすっかり毒気を抜かれたユミルは、ゼックスに聞かせるようポツリポツリと話だした。

「私は幼少のころ、両親からお前にも英雄の血が流れていると聞かされ、それを誇りに生きてきた。周りもサンシャインを所持していたことから私が英雄の子孫だと認めてきたこともあり、私は必然この剣を生かすため騎士団に入ることを考えた」

まるで遠い思い出に浸るよう、そして思い出に手を伸ばすように牢に背をあずけゼックスに顔を見せることなく話す。

「私が7歳の頃か、丁度10年前だな。両親が他界した。病死と聞いていたがその頃私は王宮の騎士団に入るため王宮から出ることも叶わず、葬式にも出席出来なかった。今思えば地位よりも両親を大切にすべきだったと思うよ」

遠すぎる痛み顔に顔を埋めなくなるが、それでも話は続く。もしかしたら、傷が深すぎてそれを振り返らず、誰にも話さずにきてしまったがため、閑流の如く話が止められないのかもしれない。

「それからはひたすらに剣の修行、軍略、勉強に励んでいたか。おかげで今の地位がある」

恐らくかなりの部分を端折ってはいるのだろう。単純に語るべきことがないのか、それともゼックスが語るべき対象ではないからか、それとも口下手だからなのだろうか。

それを推し量ることは出来ないが、ユミルはこれで話終えたとはかりにため息を吐き出した。

「とりあえず、こんな感じね。…これでいいのかな？」

ユミルは改めて牢の方へ顔を向けると、ゼックスの表情からは同情のようなものが伺えた。

「別に同情とかはいらないわよ。自分が不幸と思ったことはないし、あなたに同情してもらおう間柄でもないし」

そうビシッと話を切るように、ゼックスに釘をさしておく。

「そうか……そうだな。ならこっちも答えよう」

何に共感したのかは分からないが、ようやくゼックスが自分の名前以外を語ってくれるようになったのは大きな前進だった。

「俺はこの街の出身だったらしいが、詳しいことは分からない。捨てられたみたいだからな、生まれてすぐに。」

その独白にはユミルも同情を覚える。とはいえ、貧民街ではもしかしたら普通のことなのかもしれない。

「その後師匠に拾われて、17年か。その間ずっともう1人と一緒にルナグルスつてのを叩き込まれた。ようやく今になって師匠が「世界を見て、知れ」、ってことを言っただけに降りてくることが出来ただけどっつから俺の物語の始まりだな」

ユミルはなんとはなしに察しがついたが、口を挟まないようただ相槌だけを返す。

「貧民街さ。強盗殺人何でもありで、死んでも棺桶はいらない。むしろられて、捨てられるだけさ。…ハッキリ言っただけ俺はそんな世界がみたいんじゃない。本の知識でしか知らないが碧く広大な海、活気ある街、自然と調和する国、何よりかつての英雄が望んだ人が人を助けあう世界つてのを見たかった」

ユミルは罰が悪そうな顔で俯く、多分かなり古い伝聞書をゼックスは読んだのだろう。自分では探しても見つけれなかった英雄の記録を少し羨ましく思う。

「だから俺は相棒と共に貧民街で呼びかけた。この国を変えよう！」

俺達がかつての英雄が望んだ平和を取り戻すんだ！つてな」

ゼックスの言葉はおおよそ正しい。きっとこの国を外から見たからこそ気付いた矛盾にキチンと立ち向かおうとした。でも

「手段が間違っているわ。革命なんて力に頼らなくても対話によって内部から変えられる可能性だつて残っていたのに」

「その矛盾、自分で気づいてないのは考えていないからか？貧民が平民街に行くだけで圧倒的な差別を受けるのに王宮に入る？無理だな。更に行くならば今救いが必要な奴が大勢いる。今こつ話している間にも餓死している子供がいるんだ、命が平等ならそいつらだつて救われなきゃあまりにも報われないだろ？」

ゼックスの言葉は1つ1つが正論であるだけに苦しい。国としての立場から言える言葉はその小さく純粋な願いを汚すだけの言葉にしかない。

ユミル個人で言える言葉であれば、それはゼックス寄りの発言になつてしまったためユミルは沈黙する他無かった。

「そうして結成されたのが革命軍メシアさ。俺達は結成と同時に誓いを1つだけ立てた。……『俺達はこの革命を成功させる、だがそこに血は伴わない、必ず誰1人殺すことなく、誰1人欠けることなく成功させよう』とな」

そういえばとユミルは思いだす。最初の爆破の手際があれだけ見事だったのに、あれだけ自分に優るとも劣らない力があるのに、この男は戦いを避けよう避けようとしていたことを。

その心の奥にあった大切な誓いをユミルは聞いてしまった。そして後悔する。

もう、ユミルからゼックスにかける言葉が見つからないのだ。

大義も正義もゼックスの方に理想がある。事実国力は衰退しているし、現国王や側近の政治力を不満に思っているものも多いと聞く。

ゼックスはまだ夢見る若者かもしれない、しかしそんな若く純粋な

理想だからこそ人は信じて付いていきたいと考えるかもしれない。そんな不思議な魅力がゼックスにはあった。そしてそれを叶えようと考え、実行し、理想に近づくための力も持ち合わせているならばもしかしたら、と皆考えてしまふに違いない。きつとそれが『革命軍 メシア』なのだろう。

「さて、こんな感じかな」  
ふと顔を上げてみるとゼックスが、自分の話も終わりだと言わんばかりにこちらを眺めていた。

感想を聞きたいのだろうか？それとも理解して欲しかったのだろうか？

…ダメだ、ゼックスの心情を推し量ることが出来ない。

「参考になつたかな？お姫様と違って俺には俺の考えや信念がある。だから相容れない時もあると思っっている、けどあなたなら理解してくれるとも思っっている」

説得、なのか勧誘なのかは分からないがゼックスの話は理想的とも言える。

もし自分がそれに賛同したら…ゼックスが思う以上に革命は早く、スムーズに進むだろう。

だが、それは王国直属の騎士隊長として決して相容れない思想でもあった。

「別に勧誘でもなんでも無い、ただあなたの生き方に知識の1つ、人生に波紋を呼んだだけさ。別にここから出してくれとかいう気もないし安心してくれ」

…やっぱり内心を見透かされているようで、心が落ち着かない。

何かを言おうとしてもそれは全て泡のように頭の中で弾けてしまい、

喉をどれだけ振り絞っても言葉にはならなかった。

そんな空気にいたたまれなくなったのか、ゼックスの方から先に目を逸らした。

「さ、今日の尋問は大進歩だったんじゃないか、王に報告にでも行った方がいいんじゃないか？」

今日話すことはもうないと言わんばかりに、ユミルに帰るよう促すゼックス。

ただ、正直ありがたかった。今ここにいても考えが纏らない、とにかく1人でゆっくりと考える時間が欲しかったのだ。

クルリとゼックスに背を向けるとユミルは無言のまま地下から出ていった。

そんな様子にゼックスは微苦笑を漏らす。

「…俺達が出逢ったのは、もしかしたら偶然じゃなくて…」  
その先はあまりにも先が見えない想像だったので打ち消し、回復のためひたすら睡眠をとることにした。

## 欺瞞、信じる道

翌日もまた早朝に地下牢を訪れるユミル。

これで3日連続で早朝に訪ねていることになるが、話しかけるとまた昨日と同じようにこちらに顔を向けてくれる。

この3日間ですいふんと親しくなったものだな、とユミルは自身に苦笑してしまいたくなる。

そして、今日は珍しく向こうから先に口を開いてきた。

「なあ、お姫様、訪ねてきてくれるのはいいけどたまには差し入れとかでも入れてくれよ。水とパンの欠片だけじゃさすがにキツイぜ」  
そういえばとふと牢内を見回してみると、食事の配給に今まで手が付いていなかったのに、今日は今までの分が全部無くなっている。

…もしかすると、もう腕や足を動かせるのかもしれない

「本当に人間か？トカゲのハーフか前世はトカゲでもう決定だろう」  
呆れつつ冗談を口にするユミルにゼツクスも笑いながら答える。

「それでも傷を治すのに全体力と全時間を費やしてるんだぜ、努力だよ、努力。俺はトカゲじゃなくてただの人間だつての」

「まったく、ただの人間がこんなに短期間で再生するか」

「再生つてか治癒だつて言ってるじゃん。それに治癒つても完治するわけでもないし、まだまだ全身痛みがバキバキに残ってるんだぜ」  
「すまない、とユミルが軽く小声で口にしたが、その真意を知らないゼツクスからすると不思議に映ったかもしれない。

「それよりだ、昨日は色々と話してもらったな。だが目的や経緯は分かったが肝心のものを聞いていないと思いだした」

ユミルの目がスツと細まる。これは仕事モードの時だな、とゼツクスは理解するがユミルの質問は今回ばかりは答えるわけにはいかないだろう。

「仲間とアジト、これをまだ聞いていなかったな」

やっぱり、昨日の話は自分なりに考えて整理をつけている途中なのだろう。まだ迷いがあるからこそ、自分に少し優しく当たってしまったのが彼女の優しい心なのだとゼックスは気付いていた。

「悪いがこれに関しては答えられないな。まあ1人だけなら喋っても問題ないかな？」

そんな含ませぶりにユミルは少々呆れるが、それでも喋ってくれるなら都合がいい。頷き先を促してみる。

「そうだな……なら今回は、お互い名前で呼び合ってたのはどうだ？条件として」

???

思わずユミルの頭に疑問符が見える程キョトンとした顔になった。

「名前だよ名前、俺は昨日からお姫様と呼んでいたが、やっぱり名前で呼びたいし、俺も逆賊やら

反逆者なんて呼ばれるよりゼックスって名前で呼んで欲しいしな」  
どう？そんな無邪気そうな笑顔でこちらに微笑まれるとユミルも少し弱い。

なんとというか昨日から思ったのだが、実は同年ということもあり  
少しかだけ親近感が湧いている。

それに今まで自分の中で女、というものを意識したことがないが、  
この少年のような彼の見せる無邪気な笑顔は、今まで動かされなかつた母性本能をくすぐられる。

(本当に子供みたい)

同年ながら年上に見えたり、年下に見えたりとそんなギャップに  
ユミルは少しずつこの少年に感情を向けつつあった。

「んん？」

ゼックスの突然の言い分になんとなく気恥ずかしくて、顔を逸らしたユミルだが、ゼックスはそんな様子を肯定と受けたのか、

「ユミル」

そう呼びかけた。

自分の名前を呼ばれて返事をしないわけにもいかないのだから、ユミルは観念してゼックスの方を振り返ると、そこには満面の笑みでまるで子供のように返事を期待するゼックスの顔があった。

そんな表情をされてはさすがのユミルも断れずに、照れを隠せずにいながらも返事をした。

「…ゼックス」

パアッと分かり易い位の笑顔をみせるゼックスにユミルも少しだけほんの少しだけにはにかんでみせる。

ユミルは照れを振り払うために、話題を元にもどすことにした。

「で、どうなんだ？喋ってくれるのか？」

ぶっきらぼうな口調を装っていてもゼックスはおかまいなしのように、ユミルに微笑んだまま話を始めた。

「俺の相棒、あ、昨日言ったよな？俺と同じようにルナグルスの使いで、幼馴染であり、ライバルであり、相棒でもあって、メシアの副司令官。マリアっていうんだけどまたべらぼうに強くてな、俺なんかよりあいつの方がリーダーをやった方がいいんじゃないかって、結構本気で思うよ」

ゼックスが少し生き生きと話しているのは、そのマリアという存在がそれほど身近な存在だからだろう。

安心、信頼、そんな言葉を象徴している人なのだろうとユミルにも分かる。

「ま、ルナグルスってのは俺達が継承したかなり独特の戦法らしい」確かにユミルも以前から気にはなっていたのだ。ルナグルスと名乗ったことはこれまで2回あったが、その場ではあえて質問しなかつ

たがルナグルス流といったことから流派ではあると考えてはいたが。「人には得手不得手がある。勉強だけでなく、日常でだって戦闘だつて勿論そうさ。ユミルの武器が大剣であるように、それが極端な話毒針になつたら扱いに困るだろ？」

ユミルはそんな想像したこともなかったが、確かに他の槍程度なら多少は扱えるが毒針なんて攻撃手段は想像したことすらない。

暗殺者の道具、そんなイメージでくくられてしまっているため自分が扱うことは無い、そしてきつと自分の性格からいつて絶対に扱いたくない武器の1つだろう。

「ルナグルスつてのは戦闘での相性を極限まで追求した武道なのさ。遠距離、中距離、近距離全てを極めたものが戦場に立った時の恐怖が分かるか？」

例えばユミルの大剣はどちらかという中距離に近い射程を持ちえる。

よつて懐まで潜り込まれる徒手空拳やナイフ等の近接武器は、潜り込まれた場合相性が悪い。

また、銃や砲弾、弓等遠距離から一方的に攻撃されれば苦戦もあるかもしれない。

もっとも個人の技量によるので、ユミル程の熟練者ならばそのどちらでも相手になるのは少ないだろう。

遠距離から打ち込まれる前に接近してなぎ払う、中距離において徒手空拳の敵を一方的に殲滅する。

だが、ゼックス等自分が認めた実力者が相手だったら？先に挙げた可能性も出てきてしまう。

「そういうこと、俺達の武器は銃による遠距離、長刀による中距離、

銃に備えてあるナイフ、つまり銃剣による近距離全てに対応する間合いを極めた戦闘スタイル。それがルナグルスだ」

ユミルは柄にもなく関心してしまった。

今まで武道や軍法において極めるのは1種類が良いとされていた。

それは各々の力量や収斂時間、得手不得手が必ずあるからだ。補助技能として他の武器を扱うこともあるが、あくまで補助だ。

もしゼックスの言った戦術が確定できるのならば、それは戦闘のエキスパート。苦手な相手が存在しないということである。

同程度の力量であれば、一方的に相手を殲滅できる理想のような戦法だった。

だが、それには多くの難題があったはず。

才能と努力

まさに愚導者。生涯の全てをそこに費やしたかのように訓練に明け暮れていたに違いない。

ユミル自身も似たタイプだが、ゼックス達とは見ていた頂点が違った。

きっと自分の方が低い頂点で止まっていたしまったのだ。

「分かってくれたかな？極めるってのはまだ俺達にも出来ていない。だが、師匠から基礎は教えたってことで山から下りて世界を見てこいって話になったんだ」

それで昨日の話と繋がる。どうしてここまで純粹にこの国に疑問を持てたかを。

彼らは外の人間、この国にいながらも外からものを見れる人間だったからだ。

だが、ふとユミルは疑問に思う。何故最初出逢った時には真つ向から向かってきたのだろうか？

同じ中距離で戦う理由、それが事実ならばあの地形の悪さを抜きにしても遠、近と連携を組めば倒せたかもしれないのに？そんな疑問を抱いてしまったユミルは、聞くのが少しはばかられたが素直に聞いてみることにした。

「ゼツクス、お前は何故私と出逢った時にルナグルスを使わなかった？お前の話が本当なら、お前の実力ならば今こうして牢にいることもなかったかもしれないのに？」

その問いにゼツクスは至極真つ当と言わんばかりに答えた。

「俺が一番得意なのは刀による攻撃なんだ、他のはマリアに劣る。だからあの場で一撃、ユミルに真正面から挑むなら俺の全力を出せる抜刀術しかないって思ったんだ。：なんかさ、勝ち負けより大事なのが勝負にはあると思うんだ。まだ精神的に甘いからかもしれないけどさ」

やっぱりそうだ。銃を空に向けて撃つたのだからって真正面からぶつかるため。：本当に真つ直ぐなんだから。

ユミルはそこまで聞くと、踵を返し牢を後にしようとした。ちよつと驚いたゼツクスが声をかける。

「あれ？どこ行くんだ？」

キョトンとした様子のゼツクスを置いていくことになってしまおうが、ユミルも自分にやるべきことができたかのように思えた。

「用事ができた。またね」

笑顔を見せるわけでもなく、決意の瞳をみせるわけでもなく地下牢から去るユミルにゼツクスは少しだけ不安に思った。

「優しすぎる……大丈夫かな？」

地下牢から上がるとそこには意外な顔がユミルを待っていた。

「こんなに朝早くから尋問とは…御苦労様ですな、ユミル隊長」

ユミルにとつて出逢いたくない大臣の1人だった。以前も王の前で口論になりかけたし、今回もまた面倒事に違いないと思い、無視しようと思っただが、続いて口にしたってきた言葉にユミルは思わず足を止めてしまった。

「隊長と叛逆者の仲が大分よろしい、そんな噂が城内に広がってましてな。ほら、今回も私が見に来てみれば早朝という人目に付きにくい時間体を狙ったかのような尋問。いや、逢瀬といった方がよろしいか？」

キツとキツイ目で大臣を睨むと、向こうはひょうひょうと逃げ出した。

「おお、怖い怖い。八つ当たりをされてはたまりませんからな、別にこれは私が言いだしたのではなく兵が言いだしていることなので、私は親切心から隊長のお耳に入れておいた方がよいと思ってお伝えしただけなんですよ」

くつくつくと含み笑いをしながらの退場では、誰が噂の元凶かは一目瞭然のように思えたが、実際この早朝に地下牢に向かっているのは兵の誰かが耳に入れたのだろう。

それをこつも悪大解釈して広めるとは…ユミルの脳内が怒りに染まりそうになる。

(冷静になろう)

さつき地下から上がってきた時にあつた考えや気持ちは冷めてしまい、今は時期ではないと思ひ保留することにした。

自室にまで戻ると侍女のセイラが出迎えてくれた。

王宮で権力に尻尾を振り、ユミルと何かと対立しがちな大臣連中に屈しない、数少ない信頼できる部下の1人だった。

「ユミル様、また何か悩みごとですか？」

ユミルが最近急がしそうに軍務に追われつつも、部屋に帰ってくる時はいつも悩んだ表情だったのを長年の付き合いで察してくれていた。

（もう4年もか）

別に侍女を持つ気は最初はなかったのだが、ユミルの部隊にいたこのセイラだけは最初から自分をよく慕ってくれており、仲が良くなるにつれ自分で部隊を止めてまで自分だけの側近になってくれた。今でも自室の管理や情報収集、武器のメンテナンス、更には軍略、軍議の資料作成等もはや並の秘書よりも有能な働きをみせてくれている。

そんな彼女だからこそ、ユミルも大きすぎる事件でなければ話して相談に乗ってもらったりもしている。今回も聡い彼女だからこそ、相談内容にもある程度察しがついているのではないかと思う。

「ああ、…実はゼツクス、あの反逆者なんだが庇ってやれないだろうか？」

「はあ、と大げさにため息を付かれると隊長としての自分に少し情けなく思うが、今回の事情が事情だけに仕方がない。」

「あのですね、ユミル様がこの国の異常さに気付くのは良かったと思いますよ。遅かれ早かれこの国は崩壊する、そんな国にいつまで忠義を尽くすのかと私いつでも不安でしたから。……でも、今回のようなレベルではすみません。立派な反逆の助長になってしまいます、時期が悪すぎる。最低でも2年は間を空け、その間に同士という力を蓄えてこそ口にできる言葉です」

「いつもそうだ。セイラはフォローもよくしてくれるが、自分が間違っていると思ったらそれこそ歯に衣着せずつ的確に指摘してくれる。」

「それこそ、ユミルが欲しい意見そのものだからこそ本当に彼女はよく出来る。」

「やはり無理か」

「無理ですね」

「即答ぶりに苦笑を洩らしそうになるが、それもそうかと思いを考えを

保留したまま覚えてだけおこうと心に決める。

そんな様子にホッと安心したのか、セイラも自室の掃除に戻っていた。

（反逆者の思想について私が王に意見すれば正に自分で逆境を作るようなもの。これはまだ報告できないな）

そんな考えの甘さをユミル達は遠くない内に後悔する。

翌日、更に翌日もゼツクスの地下牢を訪れたが特に進展もなく、5日が過ぎようとしていた。

ゼツクスの会話は心地よく、ユミルも自然ゼツクスと話す時笑顔が少しずつ増えていた。

だが、6日目に突如王から呼び出しがかかった。

「ユミル、どういうことだ？」

王からの言葉は的を得ていなくて意味が明瞭に掴めなかった。

王へは報告書にてゼツクスの情報を開示していたし、1度直接様子を話に出向いたこともある。

それなのに、今回の呼び出しは急な上に用件が掴めない。

「今城内ではお前が反逆者と通じているとの噂でもちきりだ」  
そこで全ての糸が繋がった。

（…やられた）

自分ではそこまでの脅威に思っていなかったが、テロで兵達の心にも乱れがあつたに違いない。

そんな人心を利用してか、大臣が噂を広め回ってユミルの失脚を狙ったのだ。

甘くみていたユミルはセイラを通じての情報の正確さ、噂の鎮火を任せていたが火の勢いが強すぎたらしい。

こうして王にまで呼び出されたということは、今回ののは非常に性質が悪いらしい。…自分でも噂の鎮火に当たればよかったと後悔をし

たくなる。

「王よ、失礼ながらその件に関しては全くの誤報、誤解、悪意のある噂に過ぎません。実際は報告書にもあるように着実に相手方組織の解明を進めておりますゆえ、ご安心を」

自分の言葉が今程弱いと思ったことはない。今は言葉ではなく結果が欲しかった。そうでなければこの苦境は乗り越えられないだろう。「私としてもユミルのことを信用したい…が、こんな噂が広まっては困る。噂であればいいが、万が一ということがあれば国の存亡にかかわるのでな」

「王よ！」

思わず言葉を荒げてしまうほど、王の言葉は辛辣で無能だった。

悪意のある噂程度で国が傾くもんか、確実に大臣にそそのかされたに違いない言動だった。

「だからこそ、ユミルは惜しいと思うからこそ元凶となっている反逆者の処刑を明日に移す。変更はなしだ！」

苦肉の策、本当に全部急ごしらえの策だ。御触れで10日と出しておきながら短縮することの信用の失墜、理由もそれらしいのをつけるだけなので民にすら疑問に思われることこの上ない。

元凶を処刑したからといって噂が消えるわけでもないのに、それでもユミルのためと言って強行する無策。

…自分の保身しか考えていない。

何故気付かなかったのだろうか？…もうこの国がこんなにも手遅れだったことに。

ゼックスと話せて初めて気付いたこの国の矛盾、もはや疑いようなない位歪んでいた。

王からの宣告は一方的で、処刑場の警備もこちらに一任すると言われたが明日まで会議の連続で本当に纏め上げて警備に移れるのだから

うか？

それと同時にゼックスにもこれは伝えなくては、そういった思いがあった。

あんな純真な人だからこそ、嘘偽りなく、そして知らせないということもしたくなかった。

しかし、伝えられるのは深夜になるだろう。まだ昼だが警備の会議が長くなりそうだということだけはしっかりと把握できていた。

## 救出劇

深夜、すでに時刻が0時を回ってしまった頃、ようやくユミルはゼツクスのいる地下牢へと行くことができた。

処刑は決定済み、何より自分がたった今までその処刑を完全なものにするための会議をしていたのだ。万が一等あっても困る。

自分が処刑するわけではないが、自分が最後の望みを絶った本人だというのにその人を庇いたい、そうでなくてもきちんと話しておきたい、そんな複雑な心境のまま赴いた。

さすがに深夜ということもあってゼツクスは眠っていた。

いや、ここ数日しか会ってしないが全部早朝に会っていたため全部眠っていたようにも思えて微笑を漏らす。

少し忍びないが声をかけて起こすことにした。

「ゼツクス？起きているか？…さすがに眠っているよな」

そう思ったため息が出そうになるが、ゼツクスから返事の声が聞こえた。

「起きたよ、ユミル。…さて、いつもの早朝じゃないってことは何か悪い知らせかい？」

起きて早々察しが良いのはいいことでもあるが、悪いことでもあった。ユミルとしても世間話から入れた方が気が楽だったかもしれない。

「……お前の処刑が決まったよ。。もう時刻が変わってしまったから今日…だな」

深刻そうな表情で、言葉はそれを絞り出すのが精いっぱいだった。しかし、牢の中から聞こえてきた声は意外と快活な声だった。

「ま、そんなどうでもいいことはおいといて、ユミル、俺はユミル

って呼んでるんだぜ？」

どうでもいい、自分の処刑のことなのにどうでもいいと言い放ち、そして自分がゼックス、と呼ばなかったことに対してだけ怒っていた。

…なんて単純。そんなゼックスなりの優しさにユミルも少しだけ緊張がほぐれた。

「ごめんね、ゼックス」

クスツとはにかんでみる。似合わないと自分では思うがそうした方がゼックスは喜ぶと思ったからちよつと無理してみた。

「ユミル、そうそう笑ってた方が似合うよ。本当はユミルとっても優しいからさ、そんな隊長って責務が無ければ今位柔らかい表情をいつもしていたんじゃないかな？」

ありもしない日常という幻想。…でもいいかと思う。

明日消えゆく命を前に自分が何か出来るわけでもないし、最後の最後…：友人として言葉を交わして記憶に残しておけるのならば、それはそれで意義深い夜かもしれない。

「そうかもね」

全く、この男にはかなわないな。どうしてこんなに踏み込んでくるんだらう？

心に踏み込んだ会話、でも、嫌な感じはしない。…ううん、それどころか心地良い。

もつと話していたくなる。

「ゼックス、…もしよかったら最後の話相手になるっか？」

そんな皮肉交じりの言葉にも慣れたもんで、ゼックスも軽くおどけながら答える。

「最後って断定されちゃった。…でも話相手になってくれるなら今夜は寂しくならずにすむな」

そう笑っているゼックスにユミルはパンとコーヒーを差し出す。

「そついうと思ってた」

それからゼックスとは色々話した。

ゼックスの山での修行の様子や、逆に自分の王宮での立ち振る舞い等話題は尽きなかった。

ゼックスは話すのも上手だが、聞くのも上手だった。

ユミル自身口下手と評価されているのを知ってはいるが、ゼックスは先を促すのが上手く、また相槌を適度に打ってくれるので本当に話しやすい。

セイラもこんな調子だが、セイラ自身は業務が忙しいらしく業務報告の方が最近が多かったためこんな世間話は何年ぶりだろう？

ふとセイラを思い出したついでにセイラのこと話してみる。

「そうそう、私には侍女のセイラという部下がいてな、すごいんだぞ、まるで敏腕秘書みたいに色々手伝ってもらってる。あれである給料は低いといつも2人で話してて」

「へえ、いい部下じゃないか。低いつて言っても王宮で暮らして、しかも自分で志願したユミルの下で働けてるんだろ？そりゃ、低くても我慢できるって」

「そうなんだろうな、結局その話のオチはいつもそこに着地するんだ。「ユミル様の下で働けてるだけで十分」って」

「ははっ……………あ、」

ふと訪れた沈黙。かれこれ2時間程だろうか？話し込んでいたが会話が途切れたのはこの時が初めてだったので、ゼックスが何かを思い出したタイミングだったのだろう。

それが少し気になってユミルは恐る恐る聞いてみる。

「どうかしたのか？顔に出ているぞ」

少しからかい半分で聞いた方が話しやすいかと思って、そんな口調

にしてみる。

ゼックスはああ、とそんな気遣いに少しだけ苦笑しながら答えてくれる。

「いや別に大したことないんだが、マリアのことを俺も思いだしてな。あいつ今頃……今頃、うん絶対何か企んでるな」

「企む？」

聞き逃してもらえれば良かったのだが、聞こえてしまったからには答えないわけにはいくまい。

「…多分救出、あ、勿論俺のな。俺は多分それ待ちだと思う。脱走してもいいんだが、それじゃさすがにすぐ捕まっちゃうし、それならどうせ助けがくる処刑場で待つてた方がいいなと思って」

それはたつた今まで自分の処刑を完璧にするための会議をしていたユミルにとって、挑戦状のような話だったから多少話しづらかったのだ。

「…なんだそんなことを気にしていたのか。例え相手が誰であろうと警備は完璧さ。それにお互いが理念を持ってぶつかりあうならば、その結果はどちらに転んでも認めざるをえない」

ゼックスから視線を外し遠くを見つめるユミル。  
だが、ゼックスはあの破天荒な相棒ならば確実に自分を助け出すだろうと確信していた。

目の前にユミルには申し訳なく思ってしまう位に――

時は遡つて5日前――

ゼックス投獄の知らせが『メシア』に届いた。

「あんのバカが捕まった!? なんてバカなのよ! ホントにバカ!! 計画も誓いも何もかも忘れて何遊び呆けてんだか!」

今は不在の司令官の椅子に座るのはゼックスと同じ年頃の少女の姿であった。

蒼い長髪をたなびかせ、不機嫌そうな表情でも整った顔立ちが伺える端麗な美は『女神』と称される程であった。

そんな周りの高評価をマリアはどうでもいい、の一言で片づけ日常の資料を全部端にどかして部下に命令する。

「すぐに軍議よ！幹部3人、今すぐ呼んできなさい！10日後の処刑場でさっさとあいつを奪還するわよ！」

ハッ！と威勢のよい返事とともに駆け足が部屋の外で響いて行くのを確認した後、ユミルは地図を広げた。

王宮周りの市街地を描いた地図で、処刑場を確認する。

本来そのような場所はないため、王宮前の広場が一時的に使われるらしいのでその周辺の地理も頭に叩き込む。

（さて、メシアってのを世に知らせるには丁度いいかもね）

すでにマリアの中では救出の道筋は組み立てられており、今はその指示を出すだけとなっている。

マリアが考えているのは、それをどれだけ派手に演出し自分達の存在をアピールするかの一点に絞られている。

本来不殺が誓いに入っていないければ、広場の敵兵が1000人いようが1人で殲滅できてしまう程恐ろしい戦闘力を持っているが、不殺を貫くからには遠回りに手加減や誘導等を駆使しないと難しいだろう。

だが、軍師でもあるマリアには揺るぎは見えない。マリアが見つめるのはもつと先、未来しかみていない。

ゼックスが皆に見せた理想の世界、マリアが一番楽しみにしている世界の実現のため自分が一番奮迅し理想の原動力になろうと誰に言うわけでもなく決意していた。

そうこうしている内に3幹部の人材が指令室に集まった。

それぞれ政務及び雑務部隊担当の「ヒイラギ」、情報収集及び伝令

部隊の「ユリ」、戦闘部隊の「ノバラ」の3人だ。

「作戦目的は10日後に行われる処刑の阻止、及び捕えられたゼックスの救出。方法としては………で行う手筈を各自整えるように。」

3幹部と呼ばれる人材だけに、優秀なものをそこに立てた訳だがそれでもマリアの突発的かつ斬新な作戦についていける頭を持つものはこの大陸ではゼックスだけだろう。

皆呆然としつつも、その超全とした策に関心をしていた。

「ヒイラギ、さつさと雑務を終えてこつちの仕事を持って行って。」

ユリ、引き続き王宮周辺からの情報入手、それと情報の流布の用意を急がせて。ノバラ、さつさと火薬職人を連れてきなさい！」

ハッ！と幹部ですらマリアには頭が上がらない。

実質ゼックスが気ままに動きがちなため、普段からマリアが指揮を採っていることが多くみなこの状況には慣れっこであった。

「それと、イレギュラーが起きた場合についても検討するから各自5日で準備を終わらせて、いいわね！」

そりゃ無茶な、そう皆が言いたくなるような日数を吹っ掛けられたが、そもそも皆弱音を吐く位なら革命等起こさない。

今が不眠不休だとしても、ゼックスの言うような世界に自分の居場所があるならば……そんな想いが皆の支えだった。

そしてそれこそが、皆がゼックスをリーダーとして認める証であった。

どれだけマリアの方が優秀でも、ゼックスの理想がメシアの骨格でありゴールなのだ。

マリアではそれを示せないからこそ、マリアもゼックスをリーダーに推薦していた。

「……さつさと戻ってきなさい、バカゼックス」

少しだけ視線を宙に漂わせると、すぐに戻して自分の言うイレギュ

ラーについて思考を巡らせることにした。

そして5日後には見事に準備を終えた3人がマリアの下に集まっていた。

「よく頑張ってくれました。本当に感謝しているわ」

マリアが微笑むと、正に天使のような笑みで3幹部もそれを見るのが密かな楽しみであった。

特にユリを除く2人は男であるため、とりわけこの笑顔の効果は大きいのだろう。

マリアは最終確認のため3人に着席を促す。

「さて、実行部隊だけどノバラが陽動として20人1部隊で5部隊出撃、それぞれ東〜西までバラけさせて陽動、そして退路の確保だけはしっかりね。後例の部隊の待機場所は北東の丘が丁度いいわ」  
ノバラが力強く頷き、肯定する。

「ユリ、あなたの部隊で度胸があるのを数人連れて広場にまぎれこんで。そして陽動部隊を意識させるよう叫ばせる、あくまで一般人の振りをしてね」

心得ました、そう冷静に返事を返すユリ。

「ヒイラギ、私も出るから本部はよろしくね。ちゃんと下水道の整備しておいて、敵は迷うけど私達は通れるようにね」

「勿論、すでに整備済みですよ」

柔和な笑顔で答えるヒイラギという青年。ユリも若いヒイラギも若い。

メシアの人材不足もここにあり、だが優秀であることと年齢は関係ない。あれだけの雑務に追われ人手も足りないにも関わらず、マリアの指示の先を見越しての行動はさすがと褒めてあげたい所だ。

「合図と共に私が攪乱させる、ノバラとユリの部隊はそれを見逃さ

ないようにね」

ハッ！と力強い返事が重なる。

「さて、確認を終えたから後は自由時間にするわ。待機状態は維持していれば問題ないからノバラは仮眠でも取ってなさい。ユリとヒイラギは残念だけどまだお仕事残ってるんでしょ？眠れるのはもうちよつと後ね」

くすくすと小悪魔のような微笑になるが、誰も文句等は言わなかった。

3人共実際マリアがこの4日間一切睡眠をとっていないと知っていたからだ。

自分の仕事に加え、自分達3人では手が回らない細かい調整、部隊の指揮や訓練、さらにシミュレーションを叩き込んでいたのだから頭が下がる。

「さ、解散しましょ。私は自室にいるから何かあればそつちにきて」

マリアは自室に帰るとふう、とようやく息を吐きだせた。

「全く、面倒事が増えたわね。当初の予定が大幅に狂ってるじゃない」

それに心配ごともあった。仮にも油断、慢心が多いゼックスとはいえそれを打ち取ったユミル、その実力は高いと認めざるをえない。

「さすがは英雄の子孫か…とはいっても脅威でもないでしょ。あいつのことだからバカやつただけでしょうし、でも厄介だな」

ため息が漏れてしまう。ユミルのことではなくゼックスのことだ。「あいつが自力で帰ってこないってことは深手を負った？それともユミルに感化された？どちらにしてもあいつが戻ってきてても戦力としては数えられないか。私が動くしかないか」

そう呟くと、ビタミンの錠剤を口を含み喉に通す。

「全く、次は金庫破りの大仕事なのに…とつと帰ってきなさいよね」

しかし、事態が変わったのは翌日の正午過ぎだった。

ゼックスの処刑日時的大幅な変更。予期していたイレギュラーとはいえ無い方が良かった形だ。

「明日……ね」

指令室で待機中のマリアは3幹部待ちだった。

明日ではゼックスの回復は望めない。どんな深手でも動ける位には回復しているだろうが、空を駆けるような元気さは戻ってしまい。

自分が時間を稼ぐ必要がある、ゼックス自身の体はそんなに長く持たないはずだからだ。

「やってくれるわね、一体誰の差し金かしら」

思い当たる人物はいない、国王をそそのかしたのは恐らく大臣の1人。だが、その大臣でも処刑日の短縮等は考えないだろう。考えるのはユミルの失脚だけのハズだ。

…ならば誰が？その疑問は解決することなく、幹部達が部屋を訪れたため思考は中断された。

「聞いている通りよ、一刻の猶予もないわ。ノバラ直ぐに部隊を準備させて市街地へ。ユリも準備はいいわね」

2人が頷くのを見てマリアが席を立ちあがる。

「ヒイラギちゃんやりなさいよ、私の仕事溜めてたら怒るわよ？」  
実際一度もそんなことは無かったが、ヒイラギをリラックスさせるためだけに軽口で指示をしておく。

「マリア様もお気をつけて。こちらはまあ、いつも通りですよ」  
相変わらず柔和に微笑むヒイラギを頼もしく思い、マリアは司令室から出る。

「……っと、ノバラとりあえず部隊集めたら伝令を頂戴、激励の1つや2つ私からしておくわ」

メシアの女神から直接激励をかけてもらえれば、それはこれから前線に出る部隊にとってこれ以上ない鼓舞であろう。

マリアは自分の事をよく分かっている。そして何より組織というものをよく分かっている。

上に立つ者の仕事は本当に多岐に渡っており、こうした激励も一種の仕事だと分かっているから優秀なのだ。

「さあ、見事に舞台を作ってみせたわよ。後は踊るだけね」

誰にも見せることない、マリアの隠れた不敵な笑みが戦況を大きく左右する。

## 始まりは血、約束は涙

ゼックス処刑当日

「起きろ、ゼックス・レオンハート」

結局一晩ゼックスとともに語ってしまい、いつしかどちらから話題を切ったのかも覚えていない頃に眠ってしまった。

かろうじて、セツトしておいたベルの音によりユミルの方が先に目覚めることが出来たのでゼックスを起こした次第だった。

「ゼックス、起きろ。時間だ……悪いが連行するぞ」

牢の鍵を外しゼックスの手錠を確認する。…問題なく嵌っており後は連れただけだ。

ユミルはゼックスの頭をクシャツと撫でると、ゼックスもようやく目を覚ました。

「ユミル、おはよう」

どこまでも緊張感がないし、敵である自分にもこんなに親しげに話してくるゼックスを見ると本当に心苦しい。

最初の爆破がゼックスではなく、ゼックスが王宮に入宮して同僚だったのなら…もつと違う運命を過ごせたかもしれない。

ユミルは栓無きことだと思いがそう、強く願ってしまいそうになった。

「とりあえずもう時間だ。上には兵が待機しているハズだしそこからはもつと真面目に連行されてくれ」

仮にもこんなに親しげに話しかけられ続けては、最終的にゼックスの処刑が執行されたとしても自分の立場が危ういことに変わりはないだろう。

いや、既に十二分に危ういと言っても過言ではない。

ゼックスも聡いからその辺りは言わずとも分かっているようだ。囚われてからお喋りばかりしてきた彼がダンマリとなり、俯きながら

歩く様は死刑待ちの罪人そのものだ。

(…まったく、なんでこっちの方が演技なんだか)

普通は御喋りしている方が演技で、こっちの人生の終わりという緊張の方が本音のはずなのに。つくづくの変わり者だ。

ユミルがゼックスを連行して、上に居た兵達と合流する。

「これから王宮前広場までこいつを連行する。各自気を抜くな！」  
ハッ！と勇ましい声が城内廊下に響き渡った。

チラリとこちらを盗み見したゼックスは何かいいたそうだったが無視することにした。

(どうせ今こいつ、って言ったことに文句を言いたいんだろう、全くどれだけ子供なんだか)

ユミルも兵もゼックスも足を止めず広場へと向かって行った。

一方革命軍は

「さて今日の午前10時からか、後20分ね」

マリアが懐の懐中時計に目を落とす。

マリアは武装しているため目立たないよう市街地の住居にお邪魔させてもらっている。勿論無断侵入だ。

絶好の立地、そしてこの時間帯の不在をユリに調査させていたので鍵を壊して侵入している。

犯罪だとは分かっているが、銃やら刀やらを持って広場に行ったのでは怪しんでくれというようなものだ。

他のノバラの部隊も装備をある程度偽装や小型化させたもので固めである。

広場はすでに人だかりが凄まじく、警備も多いが一般市民も多い。ユリ達が紛れるには絶好だが、ノバラ達は無事に撤退出来るだろうか？スウと深呼吸をする。

（大丈夫、みんなの最優先は撤退だから。あくまで陽動の彼らを助けられるのは、私だけ）

銃に備え付けたレンズで広場の様子を再度確認してみる。…未だゼツクスもユミルも現れる様子はない。

だが、出てきた瞬間処刑、なんてイレギュラーで最悪なパターンもあるかもしれないのでマリアは一切の気を緩めずに警戒を続けた。

それからキツカリ20分後にユミルを先頭に、ゼツクス、そして騎士団の面々が王宮から広場へと向かってきた。

「さあ、ユリ合図を間違えないでね」

実際に現場にいない自分にはどのタイミングで仕掛ければいいのかの判断が遅れる。だからこそユリにその役は任せてある。

レンズで様子を逐一伺うが、まだゼツクスが処刑段に上がる気配はない。かといって何かを話している雰囲気でもないし、ユリからの合図もない。

（…まだ様子見、か）

もうこうなれば突っ込んだ方がこのジリジリとした空気に耐えなくて済むのに、と思える程長い数分だった。

1分だったのか、2分だったのかそれとも5分だったのか分からないが、ようやくゼツクスが処刑段へと上がった。

「いつでもいいわよ……」

ゼックスは処刑段を一段一段踏みしめながら登った。時刻は10時丁度からだったらしいが、王やその他の執政官組の到着が数分遅れていたため自分も待ちぼうけだったのだ。

ようやく現れた国王達を確認するや、ユミルが道を空けてくれる。

(全くご丁寧なことに)

苦笑を洩らしそうになるが我慢する。歴代の処刑された人達もこの場になると反抗心つてやつは消えていたのかもしれない、と思う。こんなに観客に見守られた舞台、そこに登る自分はさながら主役のようだ。だからこそ意地汚く生きるよりも、最後の最後に輝いたまま死にたい、そう願うのかもしれない。

こんな舞台に立てる程の犯罪、罪は時代によって変わるのだから今まで裁かれた罪人も時代さえ違ったら英雄だったのかもしれない。

だが、自分は英雄ではない。英雄は下で自分の事を悲しげに見つめてくれているただ1人だ。

……だからこそ、英雄ではない自分は舞台上上がると横に斬首刀をもつ2人には目もくれず、1歩先を踏み出し観客に言葉を向ける。

「俺は革命軍メシアがリーダー・ゼックスレオンハートだ。お初にお目にかかる、市民の皆さん」

手が塞がっているので、お辞儀も不格好になっってしまうが気にはしない。

横の兵も、下の兵も特に動く様子がないので最後の言葉位は言わせてくれるのかもしれない。いやはや、優しいのか甘いのか。

「俺は……俺達はこの国に疑問を投げかけたい、何故人が人を差別するのか？何故、助け合えないのか？俺は初めて訪れたのが通称貧民街と呼ばれる場所だったからこそ鮮明に覚えている。皆生きるために必死で、それこそ周りを気遣う余裕がないくらいに」

眼下の市民から失笑が漏れている。人の死というものをわざわざ見物にくるようなものの好き、逆に言えば娯楽や刺激を求めてきているような満ち足りた生活をしている存在達だ。

「だが、誰も手を差し伸べない、本当は気付いているのに見てみない振りをする。これは人間といえるのだろうか？それとも貧民街の人間は人間ではないのだろうか？」

舞台客に語り続けるゼックスに少しだけ注目をする人、そしてそれを快く思わない人、特に王宮側は目に見えてざわついてきている。……急がないと。

「だからこそ問おう！遙か古の時代英雄『翼』が提示した理想の世界を！「人と人が助けあい、自然、いやこの星を大切に、育まれた命全てに優しさをかけられるような世界を創ろう！今度は間違えないよう一歩一歩確実に皆で考えて！それが『アース』から『タヘル』へと星の名前を変えた罪と決意だから！」と！」

眼下の世界が著しくざわつく。何故ゼックスが3000年前の英雄の言葉を知っているのか？

今は殆ど誰もが覚えていない歴史、だが、その言葉の意味は考えるよりも先に感じられる力が込められていた。

そう、英雄が3000年前に残っていた人々全てに刻んだ魂の記憶。忘れ去られても、いつかまたこの言葉を思い出して間違ってしまった道を正しく戻してくれるために刻んでくれた、『魔法の言葉』

それはそよ風が運んでくれた、今は誰も知らないはずの景色をみなに見せてくれたかのように。

魔法は、まだ続いていた。英雄『レナ』が4英雄の想いを束ねて魔法として残していてくれたからこそ。

沈黙が場を支配する中、ゼックスの後ろの方から声がする。

「な、何をしている！こんな演説は今すぐに止めさせる！衛兵！今すぐにそいつの処刑を実行しろ！」

国王が力の限りで叫んでいるようで、ようやく兵達も我に振り返り始める。

今の奇跡はやはり奇跡なのだろう、とても儂いからこそ3000年という永すぎる時の中で色あせてしまった。そう、3000年後の世界では一瞬しか持たなかったからだ。

(……だが一瞬でもいい)

これで何かが変わる、革変の序章が始まるかもしれないとゼックスに予感させたからだ。

「衛兵！」

2度目の王の絶叫について斬首刀が持ち上げられた。

そこでユリがついに動いた。

「ゼックス様……ありがとうございます」

そう感謝をして合図を - 閃光弾を雄々しく放り投げた。

カッ！

激しい閃光が周囲の視界という世界全てを白に染めた瞬間に、ユリはその場からすり抜けるように素早く逃げだした。

兵も、ゼックスも、ユミルも国王も誰もが眩しさに呆気をとられている中、メシアが動きだした。

混乱が収まらない中ようやく閃光が落ち着いてくるまでの間4秒、しかしその4秒の間に次の攻撃は始っていた。

ドゴオン！！

そんな大砲の轟音がゆづに10発以上も同時にならされ、冷静でいられる訳がない。

何も知らない市民や兵からみればまさしく大砲による広場爆撃だと思わせたからだ。

そこに仕込んでおいた、ユリの部下が絶叫で陽動する。

「大砲で広場が爆破されるわ！」

ほぼ同時に6か所からそんな絶叫があつては、もう誰も冷静ではないられない。

ただ見物にきた観客は我先に逃げ出そうと広場の出口に向かって走りだしたのだ。

警備にあたっていた兵達も広場の外より、観客達の動きに注目したその瞬間

――花火が弾けた。

とても大きな音と共に綺麗な花火が炸裂し、昼の空に彩りを与える。もはや、一部のパニックになっていた人達を除いて大砲の轟音が花火だと分かるとその場にポカンと立ち尽くしてしまった。

それは兵も、ユミルも同様であつた。誰もが爆撃を信じた矢先、訳の分からない花火。並の人間では思考回路がショートしてしまうだろう。

そこに雄たけびを上げるノバラの軍勢。東、南東、南、南西、西それぞれから20人ずつの部隊が雄々しく雄たけびを上げながら広場に手榴弾を投げ込む。

運よく最初に広場から逃げようとしていた人たちこそ、一番のパニックに陥っているので手榴弾に見せかけた閃光弾は本物にしか見えなかったのだろう。

「うわあああつ！！爆弾だあ！！」

今度は一般人を用いての陽動。そして空砲による威嚇射撃を用いてあたかも閃光と同時に広場へと踏み入るようにみせかける。

そして閃光弾の炸裂により、警備兵の注意はまた外へと向く。警備兵もパニツクに陥りながらも懸命に職務を果たそうと、銃を構えたり一般人の避難にあたろうとするが、それも無駄である。

ここには既にもう1人、主役が舞台上が上がっていたからだ。

おおよその視線が広場の中、空中、外、と誘導された際にマリアは屋根伝いを疾走し、広場のど真ん中である処刑段へと舞い立っていたのだ。

おおよそ1週間振りの相棒に言葉をかけるゼックス。

「相変わらず無茶苦茶しやがる」

「うるさい、ゼックスのせいじゃない」

久しぶりの再会でも軽口を叩きあえる二人には、確かな絆があった。

ナイフでゼックスの手錠を切断すると、マリアが手筈を説明する。

「ゼックスは逃げて、北西の丘の方向に脱出経路を用意してある。

私がユミルを止めておく」

簡潔にいうとマリアは刀を抜き放った。そして、知らぬ間に接近していた上空からの剣閃を受け止める。

「お前がマリアか、大した奴だ。これだけ大掛かりで派手にも関わらず本当に死者0人を目指すとは」

サンシャインの一撃はとても重い、マリアも無理に受けとめようとせず、体の柔らかさを活かして受け流す。

ユミルが後方に跳躍し、間合いを取り直す。

だが、それをマリアは許さずに銃撃により着地時の隙すら逃さない。ユミルも着地時を狙われればさすがに危ういが、体のバネだけで横へ転がりこみ回避をする。

「行きなさい」

そんな攻防すら一瞬でゼックスは既に駆けだしていた。助走をつけ、遙か高くまで跳び屋根へと飛び移る。

一部こちらを思い出したかのように振り向く観客や、兵達の目には舞台上にいるのがユミルと知らない美女ということでさぞ不思議に映っただろう。

それだけみな視線は他に注がれていたのだ。…そう、ただ1人を除いて。

「優秀じゃない、ユミル。さすがは英雄の子孫かしら」

クイツクリロードにより、すでに弾丸を補充済みの銃口がユミルへと向けられる。

だが、その視線を受けることなくユミルはゼックスの方を目で追っていた。

(…マズイ)

ゼックスの行方を追われれば逃げ切れない。ゼックスは完治していないからこそ人目に付かない場所からアジトへと向かわせる手筈だったのに、それを目撃され、追跡されたらきつと追いつかれてまた捕まってしまう。

マリアは銃弾による牽制でユミルの注意を引こうとしたが、目もくれずサンシャインを盾にして全て防がれる。

普通の剣であつたら、剣の横っ腹に銃弾を受け続けたら折れてしまふものだが、さすがは伝説の金属。銃弾をはじき返すような勢いで軽々と防いでいる。

だが、そんな程度で戦闘思考を止めることなくマリアは抜刀術を仕掛けるため僅かな距離を神速で詰める。

ユミルはこちらを一瞥するや、サンシャインで処刑段を思い切り叩

き割り強制的にこちらを後退させる。

足場が無くなる前に後方への跳躍、だが、マリアが後方へと跳んだ隙にユミルは前へと跳躍していた。

完全にマリアは視界の外。

いかにゼックスを追うかという任務だけを考えていたに違いない。

「面倒臭いわねえ！」

マリアもそれで足止めされるような実力者ではない。一瞬の遅れを取り戻そうと、加速するが……

「邪魔よ！」

ユミルが立ち退いたため、下の兵から一斉射撃をくらったのだ。

全てナイフと刀で弾き、軌道を逸らし、時には体裁きにより銃弾の雨をかわしていくが、もうユミルとの距離は詰められない所まできていた。

「……不覚」

ゼックスも懸命に駆けしたが、傷が響く。かろうじて一般人よりも早く、屋根伝いという走りづらい地形を疾走しているが、このままでは傷と体力が持たない。

今も息が切れかけてしまっている。やはり本当は死ぬような大怪我だったのだからここまで走れたことを、自分でも褒めてやりたい所だが、後ろから感じる気配を察するにそれは無事逃げ切れたら、と思う。

(……ユミル俺を追ってきたか。マリアを撒くとはやるじゃないか) マリアの実力はよく知っている。あのマリアを撒いたとあればユミルの集中力の方があの時点のマリアよりよほど研ぎ澄まされていたということだろう。

よくもまあ、あんなマリアの馬鹿げた策を見せつけられながらそこまでのコンデイションに戻せたものだ。

（自分とのおおよその距離、60mか。早ければ十秒ちょっとで追いつかれるな、こりゃ。）

そもそもユミルに見つかったままでは隠し通路が使えない。どこかで撒く必要があるのだが、この体では追いつかれないことすら難しいというのに。

「仕方がない……強制解除」

体の制限を外して強制解除。速度が飛躍的に上昇しユミルとの差が20m程開く。

しかし、その代償は大きすぎた。

「ぐっ……がつ……!!」

体がミシミシと音を立っている。骨が確実に軋んで、筋肉が切れそうな感覚が伝わってきている。

後10秒も持たない、それほどまでにこの加速は無謀なものだった。「どこか、どこかに着地して家の中と下水道を利用して撒かないと！」

ゼックスは屋根伝いから飛び降り、手近な家へと転がり込んだ。

「くっ！なんだあの加速は！」

ユミルは当初から遅れを取っていたが、ゼックスのコンデイションを考えれば時期に追いつけるハズだった。

後10秒位……そう思った矢先、ゼックスが猛加速したのだ。

始めは見間違いかと思いたい位だったが、みるみる内に引き離されていく。

「マズイ！」

これ以上引き離されて隠れられると自分では見失ってしまう。

悪い予感というのは当たるもので、ゼックスは見晴らしがいい屋根伝いから飛び降り姿を眩ました。

「逃がすわけには…！」  
ユミルも飛び降りるが、まだ距離は90m程。その先にたどりついた時にゼツクスはどこまで行き、どこに隠れているのか見当もつかない。  
だが、ここまで追って諦めるわけにはいかなかった。部下の援護射撃によりマリアの時間稼ぎの策に嵌らなかったが、十分に距離は開けられていた。  
数秒後、ユミルはゼツクスが飛び降りた地点に辿りついたが、ゼツクスの姿は見えなかった。

「はあ、はあ」

ゼツクスは一番身近な家の窓を割り、その真向かいの家の窓の鍵を空けそちらの方に姿を隠していた。

普通違和感がある場所を調べる、それが窓を割った理由だ。

こちらの窓を閉めておけばそこは侵入の形跡がないただの景色と変わらない。こんな欺きに頼るような自分が少し情けなく思えるが、それも怪我が完治すればすむ問題だ。

だからこそ今は全力で考え、全力で逃げる。それだけを考えていた。

ややあつて、ブーツの音が路地裏に響き始めた。…ユミルが追いついてきた。

ゼツクスは先の数秒前から気配を完全に絶っていたので、気配で探られることはないだろう。

問題は時間が経ちすぎることの一点だ。ユミルが窓を割った家の方の調査を終え後詰舞台が来ればこの辺り一帯の調査になるに違いない。ユミルさえ帰ればまだ逃げ出せるが、ユミルが指揮を取り始めたらそれこそ最後だ。

なんとかしてユミルが調査して遠くに行った隙を狙って脱出経路に辿り着かなければ。

だが、ゼックスの見通しは甘かった。いや、正しくはユミルを理解しきれていなかったと言った方が正しい。

「はああ!!」

外で烈火のごとき気合いが聞こえたと思ったら、次の瞬間爆発が起きた。

「ぐっ!」

思わずその爆風と音量に僅かに気配がにじんでしまう。そこをユミルに捉えられた。

「ウソだろ!？」

サンシャインを力任せに叩きつけ地面が爆発したように抉れていた。自分を炙り出すためだけに、建物すらおかまもなく攻撃を仕掛けたのだ。

「逃がさん!」

ユミルに姿を捉えられ、もう脱出経路に辿りつくことは出来ないとゼックスは悟ると、後はひたすら体力が持つだけ逃げることを決心した。

「はっ、はっ、はっ!」

すでに息が切れ切れなのも関わらず、ゼックスはひたすら走り続けた。もう目的地等どこでも変わらない、そう頭より体で理解してしまっていたからこそ、北西の丘、というさっきのマリアの一言が脳に残っていてそこを目指していた。

ユミルも当然烈火の如く追跡してきて、距離をどんどん詰めてくる。追われることがこれほど恐怖だと感じるのは、恐らく人生で初だろう。

体力的にも軍配が上がるのはユミルだったがそれでも、ゼックスは

逃げ続けた。

……もう意識が途切れるんじゃないかと思った時に、ついにゼックスは北西の丘の一本杉の前に立ち尽くしていた。

逃げる目的に着いてしまったからか、ゼックスはその場で荒い呼吸を整えるが、その後ろから死の宣告を下す英雄が迫ってきていた。ゼックスが立ち止まっているからか、ユミルも少し落ち着きを取り戻し歩いてゼックスとの距離を詰める。

ゼックスもここまで頑張ったが、ついに諦めた様子で一本杉に背を預け座り込む。

ゼックスはずっとユミルから視線を逸らさなかったが、ユミルはそれこそ目の前に来るまでずっと視線を合わせてくれなかった。

…それがゼックスには少し悲しかった。やはり自分達は相容れなかったんだな、と。

そして物語は終幕を迎える。

サンシャインを振り上げ、ゼックスに死を与える絶対に覆らない、運命。

ゼックスは瞼を閉じて、最後に願うよう言葉を紡いだ。

「ユミル、俺はここまでだ」

そして裁きの時が訪れた……

……

ゼックスは瞼を開ける。しかしその光景は瞼を閉じる前と変わらず、そして何故自分が瞼を開けられたのかも理解できた。

ユミルは剣を振りおろしていなかったのだ。

何故？そう聞こうとした先にユミルの方から口を開いた。

「…なんなのよ、なんでそんなに簡単に諦められるのよ。…あんなに誇り高い理想を謳ったのに」

それがユミルが剣を振り下ろせなかった理由なのだろうか？…いや、違う。

「俺はマリアを…ユミルを信じているからだ」

その一言でようやくユミルは顔をこちらに向けてくれた。

「俺はマリアがメシアを引っ張ってくれと信じているし、ユミルもメシアとは違うがきつとこの国のことを真に思っただけで動いてくれると信じている。…国を変えるのに必要なのは俺の命じゃない、気高き意志だ。俺にはそんな2人がいて、そしてそんな希望ある2人に俺の意志を伝えられた、それでもう十分役目を果たしただろう？」

そう、本当にそう思っているからこそ自分がここまでだと受け入れたのだ。

だからこそ、ユミルの剣は止まった。

「私が…私が本当に必要だと思っただけは…！」

涙を見せるユミルが振り上げた剣は信じるべきものを突き刺した。

後悔はない。今初めて自分の中にある英雄の血に感謝する。

そして、緑の丘に始まりを告げる尊い血が流れ、決意という涙が友との約束の導となった。

## メシア、始動

「ゼックスが死んだ!？」

あまりの凶報に思わずマリアは顔を歪め叫びだした。

あれだけ練った作戦だったが誤算はユミルの実力。想像以上の実力を誇っていたためマリア自身一瞬の隙を突かれ足止めが叶わなかったのだが、まさかそれが決定的になってしまおうとは。

情報部を担っているユリの仕事には信頼を置いているが、それでも懐疑的になってしまおう、いや懐疑的になってでも信じたくない話であつた。

「私も信じたくありませんでした。…しかし、ユミルが血塗れのゼックス様を引きずるように連れて帰ってきており、広場で高らかに宣言していました。…私も見ましたがあの血、あの顔、…本物としか」

ユリは今にも涙を流し、その場に座り込んでしまいそうな位悲しみにひしがれていた。

ゼックスの至高き理想に賛同する同志の中でも、ユリは特に感銘を受けていた1人だ。だからこそ情報収集等という最前線の任務で自分の命すら懸けて活動してきたのだ。

一重にその理想のために。…その理想の提唱者がいなくなったとしてはどれだけのショックと悲しみなのだろう。

そんな様子にマリアもようやく落ち着きを取り戻し、司令としての顔に戻る。

「…では、今からメシアはゼックスを亡き者としてこれからは私が指揮官兼リーダーとして立ちます。ゼックスの誓いは守れなかったけれど、それでも敵の1人を欠けることなくこの革命を成功させること、それがあいつへのせめてもの供養よ」

涙を一滴流しながらユリが静かに頷く。本当は声を上げて泣きたい

のだろう、だがマリアとて我慢しているのだ、それが組織の上に立つものとしての務めだからこそ。

「ユリ、ヒイラギとノバラを呼んできて。あいつがいない以上これ以上戦力を落とすことも、士気を落とすことも許されない。早急に国の大金庫への潜入に移るわよ」

涙に濡れた瞳に、燃える意志を宿し、メシアの女性2人は理想のために戦うことを改めて決意した。

一方王宮では――

「王国騎士団隊長ユミル、ただいま戻りました」

王の間への堂々とした行進、だが誰の目にもその異様さは映っただろう。

頬が返り血にそまり、血だらけの男を引きずるように王の間の真ん中を進み続ける騎士団隊長は、普段の鋼のような意志の籠った瞳とはかけ離れており、初めての殺人に言いようのない後味を感じているのか、それとも快楽を目覚めさせたのか分からない程その瞳には生気を感じさせなかった。

あまりの形相に普段ユミルに突っかかりがちな大臣達ですら息を飲み、見守る他ない。王に到っては恐怖や嗚咽を隠そうともしない。そして、普段通り王との謁見の距離までユミルが進むと頭を垂れ報告を始める。

「反逆者ゼックス、広場においての処刑は妨害に遭い行うことができませんでした。逃亡を図ったためその場であえなく処断致しました。その証として無粋とは思いましたが持ち帰り、王に確認していただくとうと」

ユミルは横にゼックスを放り出すと、王に視線を戻した。  
「どうぞ、ご確認下さい」

…しかし、動くものは誰もいなかった。呼吸すらしていないし、これだけ血に濡れた死体では臭いもキツく、わざわざ近寄ってまで確認したいとは思わない。

特に普段から血を見る事のなかった執政官達は直視すら耐えられず、目を背けている位だ。

「よ、よい。十分に確認した。反逆者の首級を逃さず打ち取ってきたな、さ、さすがユミル。もうよいぞ、その不快な死骸をとつと処分してこい！」

勿論王も血を見る機会等殆どなかったのだろう。これで話は済んだとばかりに、早々に手を振りユミルに処理を任せようとする。

「分かりました。王宮で処理するのも王の不興かと思えますので、下水にでも落として参ります」

そう言い、ユミルが踵を返す様を見届け広間にようやく安堵が戻ったと思ったその瞬間、

「…へえ、ユミル隊長お手の怪我は大丈夫ですか？」  
ユミル自身聞きなれない声が響いた。

ふとその声の主を探し、目を当てると見慣れぬ男が立っていた。

長身、銀髪ロングという一見優男風の成り立ち、しかしその瞳だけは特別だった。男の緑色に光るその瞳には形容しがたい狂気が滲み出ている、傍から見ただけで隠そうともしないその狂犬のような恐ろしい男、いったいどこの誰だ？そうユミルが思うと

「おお、忘れておったこの男の紹介がまだだったな。大臣推薦により東の大陸よりわざわざこの地に渡ってきてくれたミラルゴ將軍だ。この地の平定に力を貸してくれるということで、東のグレーデン王国からやってきてくれたのだ」

平定？むしろこの男こそ狂乱をもたらしそうだと思いたい程だ。そ

んな印象だった。

「ミラルゴです、以後宜しくお願いしますよ、ユミル隊長。しかし賊もかなり暴れたようですね、ユミル隊長程の実力者に傷をつける』、なんて」

その猫撫で声もユミルの勘に触る、人を食ってかかったような軽薄な態度、本当に將軍等という地位にいるのだろうか？しかし、ミラルゴはユミルの左手、出血している部分をじっとみつめていた。

「…失礼します」

意に介さないが、国同士の決定にユミルが口を挟める立場ではないと弁えていたためその場での挨拶を省く無礼も、こちらの態度を伝えるには丁度いいだろう。

だが、こちらの無礼にも特に気にした風もなく、ミラルゴが話を振ってくる。

「下水に行くなら気をつけて下さいよ。反逆者なんてドブネズミ、いかに臭そうですからね。そんな臭いをつけて王宮に帰ってこないで下さいね」

「……」

無言を貫き通し王の間から退出するユミル。その背中をなめずるように見つめていたミラルゴの視線はとにかく不快だった。

ユミルはゼックスの死体を引きずったまま、ようやく市街地の人目が見つからない下水まで辿りつき死体を放り投げた。

…手が血塗れだ。それに服も顔も血がベトトリとついてしまったその臭いもとにかく酷い。

こんな下水道よりも自分の方が匂うのでは？そう思ってしまう程今のユミルは酷い有様だった。

(とにかく王宮に帰って洗い流さない)

しかし、不意に左手の傷が疼く。洗い流すとなればこの傷では染みてしまうだろう。セイラにきつく包帯を巻いてから洗おうかと考えつつも下水に沈んでいくゼックスを見送る。

「……さようなら、メシアのリーダーさん。楽しかった」

それきり、思い出を振り切るかのように目を背け王宮へ、自分の場所へと踏み出した。

だが、門の前で待ち構えていたのは予想外にミラルゴだった。

王の間で会ってからのといい、本当に気味の悪い男だ。底抜けに明るいゼックスとはまるで対照的にこの男には深い闇を感じる。

このまま無視して通り過ぎようとするが、自分を待っていたらしいこの男は平気で声をかけてくる。

「お帰りなさい、下水はどうでした？たまには王宮の外もいいもんでしょ？」

クスクスと笑うその姿は気持ちが悪く通り越して吐き気がしそうだ。ミラルゴの横を通りすぎ、そのまま帰ろうとしたが、背中に不穏な言葉が届く。

「その左手、今度の御前試合で不利にならないといいですね」

御前試合？まさかと思うがこの男と国同士の交流、そうみせかけた実力の測りあいが行われようというのだろうか？

ユミルは足を止めるつもりはなかったが、それでも足が止まってしまった。

……こんな狂犬を相手にしなくてはならないのか、そのため息と同時に先ほどから指摘され続けた左手の傷。

全身が血に濡れている中で、左手だけは自分の傷と見抜く洞察力は確かにそれなりに実践を積んでいなければ分らないだろう。

「痛そうな『刺し傷』。完治して試合に臨んで下さいね」

それでは、と立ち尽くすユミルを追い越し王宮へと先に足を運ぶミ

ラルゴ。

立ちつくすユミルにツウっと汗が流れる。

(…気付かれた、のか?)

御前試合、負ける訳にはいかない。相手が未知であるからこそ、これ以上の障害はごめんだとユミルは心に固く誓った。

「ノバラ！優秀なのを15人調達して！出来れば狙撃が出来るタイプの人間！」

メシア司令室ではマリアの声がやむことなく続いていた。

「ヒイラギ！この書類は何！？武器の密輸の件難航ってどういうこと！そんな言い訳いいからとつとと交渉に戻りなさい！」

人手が足りない、マリア1人で回しきれぬ組織でもないし、ゼツクスが欠けた分急ピッチで作戦を進めていかないとメシアは自然消滅してしまう。

それだけは何としても避けるため、そして部隊としても忙しければ忙しい程余計なことをする暇がなくなり、変な噂や規律が乱れるのがある程度防げる。…もつとも苦肉の策ということも否定できないが。

「ユリ！情報部から何人かヒイラギに回して！資金面の心配は次の作戦で無くなるから、その時に物がないと資金の意味がなくなる！物を回せそうな協力者探しと協力の取りつけのサポート要員を回して！」

幹部3人も勿論奮闘はしているが、何分今回は事が事だけにハツキリと回し切れていない。

部下の仕事の割り振り、押さえつけ、そして規律を整えるだけで手一杯なのが現状なのだ。それほどリーダーの欠けた組織は脆い。

「ヒイラギ待った、次代の子供達の件だけど後回しに。正直今を成

功させなきや次なんて永遠に無いわ！メシアが解散したらもう貧民街自体取り潰されたっておかしくないの」

現実、軍の一部が貧民街に斥候にきている。斥候ということは本隊がいつ来てもおかしくないのだ。

戦争、これが現実だが戦争になったとすれば間違いなくメシアは負ける。

マリア一人で奮戦しようが、組織の勝利ではないし何より多数の犠牲を払ってしまう。マリアだけが生き残っても何も意味がないのが革命なのだ。

「く、ああもうノバラは貧民街の守りの戦略上使えないし、部下15人程度で本当に陥とせるかしら」

国の大金庫と言えば国の財源そのものだ。勿論警備も厳重だし、保管してある財は目もくらむ程だ。

そしてその守りに加わっているのが国一番の変わり者と言われるDr.ベガである。

狂気の科学者である彼はサイボーグの手法を確立し、そして実験と称して国の金庫で実験を日々行っている。

貧民街から秘密裏に連れだされた人や死体があるというのが、その狂気ぶりに拍車をかけている。

「誰が相手でも敵じゃないけど、今の相手が時間なのが勝負の分らない所ね」

もはやため息をつく暇も時間もない。自分が折れる訳にはいかないのだ。

「あーユリ、あなたは休憩しなさい。それで私と自分の分のお茶でも入れてきて、後簡易な食事でも」

「そうだな、俺の分も含めて3人分頼むよ。1週間ろくな食事も出来なかったからすっかりやつれちゃった」

司令室にいた4人が固まる。

まるで死人でも見たかのような、いや死人を見ているのだ。凶報を知らされもう生きていないと思われた：リーダー。ゼックスの姿が。

「よ！悪いがお茶と飯と風呂が先かな？下水に叩きこまれたんで目茶苦茶臭いんだ、俺」

マリアに呆れの表情が浮かぶ。

ヒイラギからは盛大な舌打ちを喰らう。

ノバラからは敬礼をもらう。

そしてユリは

「お帰りなさい！！」

下水まみれで汚いゼックスの胸に一欠片の躊躇もなく飛び込み、そして溜めこんでしまった涙が溢れんばかりに自分とゼックスを濡らす。

「お帰りなさい！……お帰りなさい！！」

少し嗚咽が混じりながら咽び泣く少女としての姿に、ゼックスは優しく髪を撫で言葉をかける。

「ただいま、ユリ。心配かけてごめんな」

「何？それじゃあれは狂言だったっていうの？」

おおよその事情、かなり掻い摘んで話したが今自分が生きてここにいる経緯が伝わった。

「ああ、あの時ユミルは……」

――

ザクッ

肉を刺し立つ音が聞こえたが、不思議と痛みはない。自分の痛覚がここ数日で完全に麻痺しきったのかとも考えたが、今も全身の痛みが引いていないことから原因は。

「ユミル。……お前」

ユミルのサンシャインは自分を貫かずに、ユミル自身の左手と杉の幹を刺していただけた。――

「何故だ？俺は死を覚悟した。そしてユミルは王国騎士団隊長だ。相容れない――」

「違う！！」

絶叫にも近い叫び声でユミルはゼックスの言葉を途中で否定した。

「私が望んだ！望んでいた国は、こんなじゃなかった！私が間違えていたんだ！！」

剣に貫かれた左手からは自分の罪を流すかのようにとめどなく血が流れ続け、ゼックスへと吸い込まれるよう落ちていく。

「国も、王も、大臣だって必要だと思っ！でも、国が進もうとしている未来だけは間違っている！権力も贅沢もいらぬ、格差が全部無くなるなんて夢はみない、でもそれを見過ごし無かったことにしている、していく未来だけは間違っている」

心の痛みが喉から嗚咽となりこぼれ、涙は後悔から止めることができぬ。

何故もつと早くから気付けなかったのか？何故ゼックスは恨まなかったのか？何故自分はこんなになるまで向き合えなかったのか？

「……ユミル」

気遣うようなゼックスの声も今はユミルには氷柱のように痛く突き刺さる。

「……行け」

その呟きの意味する所をゼツクスは想像出来たが、その言葉に頷く訳にはいかなかった。

「行かない、行ったらユミルに処断が待ち受けているのは確實、だろ？」

革命軍のリーダーの処刑が失敗した上に、そのリーダーを単独で追跡した拳句取り逃がしたのであれば大失態である。日頃から反りが合わない執政官達からすればいい攻撃材料となろう。

「打開策、というより妥協策、ならあるんだけど。……ユミル乗っ取れないか？」

ユミルは涙を流したまま目だけはキチンと合わせてくれた。

「俺の死体を王宮まで運んでくれ、つても偽装した死体をな」

ユミルの血が自分に垂れていたことから発送したアイディア。これももし全身血濡れであれば誰が確認しようか？ 普段から血という野蛮な所から逃げている王宮の人間なら欺ける。

それに、騎士団であろうものなら、ユミルは隊長だ。その権限、人望は信頼に余る。

「な？ いい案だろ？」

体が軋むだろうにゼツクスはユミルへと笑顔を見せた。

「……………分かった」

ユミルは少しだけ生気を取り戻し、自分の手に刺さっていた剣を抜いた。

「つつ！」

さっきまでは感情の方が上回って痛みを自覚していなかったが、本来なら左手をぶち抜いたのだ。骨も傷つけているだろうし痛くないわけがない。

血も抜いたと同時にまた溢れだしており、血が抜ける度に少し眩暈が起きそうになるがまだ頑張れる。

と、ユミルはあることに気付く。

「…偽装するには量が足りない。か」  
そう、確かに結構な量の血液が流れてしまっている。真下にいたせいでゼックスに殆ど被ってしまったが、それでも尚血液が全身を血濡れにするには量が足りなかった。

「ん？だから大丈夫だって」  
と言ったそばからゼックスはユミルの剣を片手で引き寄せ、

容赦なく自分を切りつけた。

「ぐっ、う…お」

加減して浅く切ったのだろうか、それでも重症覚悟の傷だ。

「な、何してる!？」

さっき死体を偽装すると言ったのに、言を翻すかのようなこの行動にユミルは呆然を通り越して怒りが沸いてきた。

「だってよ…絶対足りないじゃん…?しかも寝た振りでもいいけど、万が一まで考えるなら気絶してた方がベストだからよ」

ただでさえ重症の身のゼックスが更に傷つき、僅かばかりに回復し、今日の日のためだけにとって置いたけなしの体力も使い果たそうというのだ。

「バカ…：本当にバカ！バカバカ！限りなくバカ！」

ユミルが額を寄せるようにゼックスに寄りかかる。

「…：これでいいのさ。後は…：よろしくな。アジトは下水道から行けるから、落としてくれりゃ自分でなんとか帰るさ」

そして必要なことを伝え終えゼックスの意識が飛ぼうとしていた。

「ゼックス…：私はお前の…：」

ユミルが何かゼックスに言葉をかけていた気がしたが、意識を保てなくなつたゼックスには記憶できなかった。



## 動く不穩

-----

「そこから先は下水道で目覚めたから間が飛んできると思うが、ユミルは紛れもなく俺の恩人で同志だ」

ゼツクスが話終え、ようやくメシアの一同は息をつけた。

「ゼツクスは本当なんていうか…まあいいわ。で、とりあえずあなたは戦線復帰はしばらく無理そうね」

マリアはもう途中から気付いていたが、致命傷ではないがまた傷が増えており戦闘はおろか日常でも影響が出そうな範囲だった。

出血していた部分においては話ながらもユリが手当てをしていたので止血は済んでいる。

後はとにかく動かないように部屋に閉じ込めておけばいい。

「ゼツクス様、痛みはありませんか？」

丁寧に消毒をし、包帯を綺麗に巻きゼツクスへ最大限の気遣いを見せるユリはとても健気で献身的だった。

「ああ、ちよつと動きづらいが手当てありがとな。どっかの誰かさんとは大違いだ」

そうわざと視線を合わさずに皮肉っているのは勿論マリアへの当て付けである。

ちなみにマリアは水をさつさと汲んできてゼツクスへ躊躇なくぶちまけた。本人がいうには下水臭いということであったが、恐らくそれとは別にゼツクスの単独行動の繰り返しで心配をかせさせた八つ当たりが入っていた事はマリア本人しか知らない。

「いくら下水道にアジトを構えているとは言え、下水まみれで登場する方が悪いのよ」

一応シャワーよりも手当てよりも優先して顔を見せに来てくれたのは、ゼツクスのいい所でもあるが。

「とりあえず俺は休む、状況は休んだ後追って報告を聞く。指示はマリアが引き続き担当しておいてくれ。復帰次第俺も指示系統に回るう」

ゼックスは勿論自分の役割を分かっている。しかし、現場に出て役に立たないもの程いらぬものはない。

まずは休んで、その後全力を尽くせばいい。

「安心して、アンタが戻ってきてくれたから部隊の取りまとめが楽になるし。ユリアンたが付き添ってあげたら？」

マリアはユリアンに氣遣うように振って見たが、

「いえ、ゼックス様が無事戻られたなら私もメシアの一員として全力を尽くすまでです。マリア様お氣遣いありがとうございます」

ユリアンのいい所だ。仕事に関して全力を尽くし、あまり公私混同しない。よく言えば一途だがもう少し息を抜いても許されると思う位だ。

「そう、それじゃ頼むわね」

そんなユリアンにマリアは微笑を添えて任務を頼む。

「大金庫の襲撃は予定通り3日後。私とノバラの部隊15名での予定でいくわ、ノバラ選出よろしく。ヒイラギ、内務サボらないようにね」

はっ！と勇ましく頼もしい返事を聞けたのでマリアは席を立ちあがる。

「それじゃ各部隊へゼックスの生還報告を伝達、その後指揮権はまだ私にあることも伝えておいて。解散」

一方王宮では

「…ふう」

自室のシャワーを念入りに浴びようやくユミルは息をついた。  
左手の傷はまだ痛むがもっと痛いのは心のせいだ、脳内での痛みが  
麻痺している。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3427t/>

---

獅子の誇り 革命の救世主

2011年11月13日13時38分発行